

# **徳島市埋蔵文化財発掘調査概要17**

2007. 3

徳島市教育委員会

# **徳島市埋蔵文化財発掘調査概要17**

2007. 3

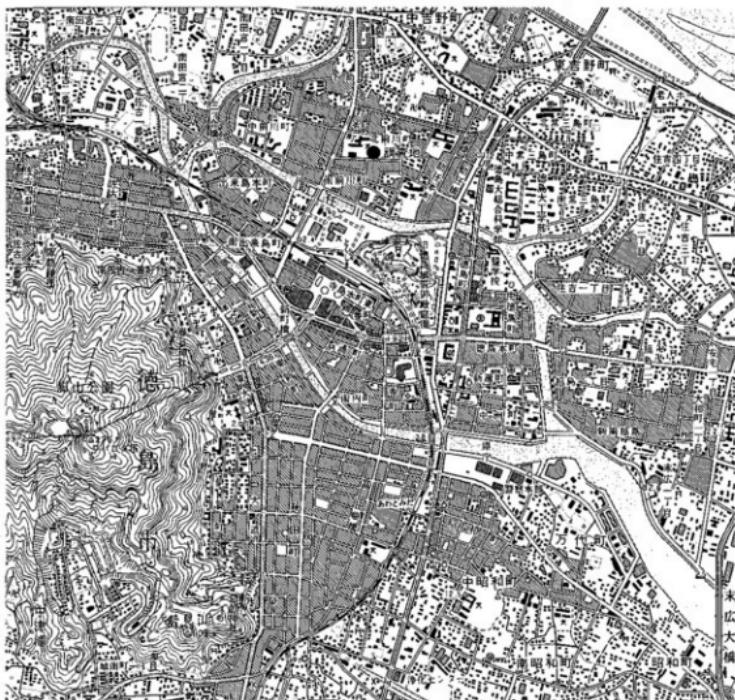
**徳島市教育委員会**

# 例　　言

- 1 本書は、2002（平成14）年に徳島市中前川町3丁目徳島市徳島中学校校舎改築工事に伴い実施した、徳島城下町跡（前川）の発掘調査報告である。
- 2 報告書作成の費用は、徳島市教育委員会の負担による。
- 3 発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
- 4 本書の編集・執筆は勝浦が行った。また、木簡の転文については、徳島市立徳島城博物館根津寿夫氏より御教示を賜った。
- 5 木製品の保存処理は、株式会社京都科学に委託した。
- 6 遺構写真、遺物写真の撮影は勝浦が行った。
- 7 発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて徳島市教育委員会が保管している。
- 8 本書の作成に係る作業には調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

阿部喜美代 中西洋子 前田千夏 日下裕子 世直香絵子 余保美代子 近藤八恵子

佐伯俊裕 中野勝美 青木健司 吉田祐子 露口啓子 折野絵美 宮浦京子



調査位置図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

## 凡　　例

1 遺構番号については、本書掲載のため新たな番号を付与した。遺物番号は連番を付し、写真図版中の番号と一致する。実測図の作成のないものについても写真図版において掲載している。

遺構番号の対照は以下のとおり。( ) 内は調査時番号。

### 1) 土壙 SK

SK01 (23) · SK02 (31) · SK03 (33) · SK04 (34) · SK05 (87) · SK06 (74) · SK07 (37) · SK08-A (42-B) · SK08-B (42-C) · SK08-C (42-D) · SK08-D (42-G) · SK08-E (42-H) · SK08-F (42-J) · SK09 (16) · SK10 (90) · SK11 (91) · SK12 (89) · SK13 (97) · SK14 (Pit386) · SK15 (115) · SK16 (113) · SK17 (119) · SK18-A (41-B) · SK18-B (41-D) · SK18-C (41-A) · SK18-D (41-C) · SK19 (68)

### 2) 溝 SD

SD01(12) · SD02(13) · SD03(14) · SD04(05) · SD05(07) · SD06(08) · SD07(09) · SD08(10) · SD09(11)

### 3) 井戸 SE

SE01 (02) · SE02 (03) · SE03 (04) · SE04 (SK76) · SE05 (SK09) · SE06 (07) · SE07 (08) · SE08 (SK08) · SE09 (06) · SE10 (Pit100) · SE11 (SK57) · SE12, 13 (05) · SE14 (SK55) · SE15 (SK56)

# 本文目次

例 言

凡 例

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章 調査の結果	3
第1節 層序の概要	4
第2節 遺構と遺物	7
1) 土壌 SK01	7
2) 土壌 SK02~08	10
3) 土壌 SK09~12	21
4) 土壌 SK13~14	24
5) 土壌 SK15~17	25
6) 土壌 SK18~19	30
7) 溝 SD01~03	35
8) 溝 SD04~07	37
9) 溝 SD08	38
10) 溝 SD09	40
11) 井戸 SE01~15	46
第3節 調査成果のまとめ	51

図版目次

挿図目次

## 図版目次

- 図版1 上：福屋家・三澤家（旧林家）屋敷界  
 (左後方に城山) (北から)  
 下：福屋家・三澤家（旧林家）屋敷界(北から)
- 図版2 上：福屋家屋敷（東から）  
 下：森田家（旧福屋家）・福屋家屋敷界  
 (北から)
- 図版3 上：土壤SK01遺物検出状況（北から）  
 中：土壤SK07遺物検出状況（南から）  
 下：土壤SK07遺構重複状況（南東から）
- 図版4 上：土壤SK02遺物検出状況（西から）  
 中：土壤SK02遺物検出状況（西から）  
 下：土壤SK08-A～J遺構細分検出状況  
 (南東から)
- 図版5 上：土壤SK15遺物検出状況（北から）  
 中：土壤SK15遺物検出状況（東から）  
 下：土壤SK13遺物検出状況（北から）
- 図版6 上：井戸SE01（東から）  
 中：井戸SE07（南西から）  
 下：井戸SE10～13（北東から）
- 図版7 上：井戸SE10・11（北東から）  
 中：井戸SE12・13（北東から）  
 下：井戸SE13（北東から）
- 図版8 上：井戸SE14（南から）  
 中：井戸SE05（南から）  
 下：井戸SE08（北から）
- 図版9 上：井戸SE07・09（西から）  
 中：井戸SE09（西から）  
 下：井戸SE09（西から）
- 図版10 土壤SK01出土遺物
- 図版11 土壤SK01出土遺物
- 図版12 土壤SK01出土遺物
- 図版13 土壤SK01(59～63)、SK02(64～74)出土遺物
- 図版14 土壤SK02出土遺物
- 図版15 土壤SK02出土遺物
- 図版16 土壤SK02出土遺物
- 図版17 土壤SK02出土遺物
- 図版18 土壤SK03出土遺物
- 図版19 土壤SK03出土遺物
- 図版20 土壤SK04出土遺物
- 図版21 土壤SK05出土遺物
- 図版22 土壤SK05出土遺物
- 図版23 土壤SK06出土遺物
- 図版24 土壤SK06(236)・SK07(237～256)出土遺物
- 図版25 土壤SK08細分以前一括 (257～261)、  
 SK08-A (264)、SK08-B (265)、  
 SK08-C (262・263)、SK08-D (266)、  
 SK08-E (268～274) 出土遺物
- 図版26 土壤SK08-E出土遺物
- 図版27 土壤SK09出土遺物
- 図版28 土壤SK10 (304～310)、  
 SK11 (311～317・321～324) 出土遺物
- 図版29 土壤SK11出土遺物
- 図版30 土壤SK11出土遺物
- 図版31 土壤SK12 (325～328)、SK13 (329～337)  
 出土遺物
- 図版32 土壤SK13(338～341)・SK14(342)出土遺物
- 図版33 土壤SK15出土遺物
- 図版34 土壤SK15 (358・359)、SK16 (360～378)  
 出土遺物
- 図版35 土壤SK16(379～381)、SK17(382～390・394)  
 出土遺物
- 図版36 土壤SK17出土遺物
- 図版37 土壤SK17出土遺物
- 図版38 土壤SK18-A (396～402)、  
 SK18-B (403～409)、  
 SK18細分以前一括 (410～421) 出土遺物
- 図版39 土壤SK18細分以前一括 (422・423)、  
 SK18-C (424～442) 出土遺物
- 図版40 土壤SK18-C出土遺物
- 図版41 土壤SK18-C (450)、SK18-D (451～458)  
 出土遺物
- 図版42 土壤SK18-D出土遺物
- 図版43 土壤SK19出土遺物
- 図版44 溝SD01出土遺物
- 図版45 溝SD01出土遺物
- 図版46 溝SD02(514～516)、SD04 (497～504)、  
 SD05(505～509)、SD06(510～513)、出土遺物
- 図版47 溝SD08出土遺物
- 図版48 溝SD08出土遺物
- 図版49 溝SD09出土遺物
- 図版50 溝SD09出土遺物
- 図版51 溝SD09出土遺物

- 図版52 溝 SD09出土遺物  
 図版53 溝 SD09出土遺物  
 図版54 溝 SD09出土遺物  
 図版55 溝 SD09出土遺物  
 図版56 溝 SD09出土遺物  
 図版57 溝 SD09出土遺物  
 図版58 溝 SD09出土遺物  
 図版59 溝 SD09出土遺物  
 図版60 溝 SD09 (704~709)、SD07 (517~519)  
     出土遺物

- 図版61 溝 SD07出土遺物  
 図版62 井戸 SE01 (710~720)、SE02 (721~725)  
     出土遺物  
 図版63 井戸 SE03 (726~729)、SE04 (730~741)、  
     SE05 (742~744) 出土遺物  
 図版64 井戸 SE06 (745~762)、SE07 (763~767)  
     出土遺物  
 図版65 井戸 SE07 (768~774)、SE08 (775~781)  
     出土遺物  
 図版66 井戸 SE08出土遺物

## 挿 図 目 次

- 図1 調査地の位置と周辺 (安政年間)  
 図2 調査地の配置と絵図 (安政年間: S=1:5,000)  
 図3 北壁断面図 (部分) 基本層序  
 図4 遺構配置図  
 図5 土壙 SK01出土遺物  
 図6 土壙 SK01出土遺物  
 図7 土壙 SK02出土遺物  
 図8 土壙 SK02出土遺物  
 図9 土壙 SK03出土遺物  
 図10 土壙 SK04出土遺物  
 図11 土壙 SK05出土遺物  
 図12 土壙 SK06出土遺物  
 図13 土壙 SK07 (237~256)、  
     SK08細分以前一括 (257~261)、SK08-A (264)、  
     SK08-B (265)、SK08-C (262~263)、  
     SK08-D (266)、SK08-E (268~277)、  
     SK08-F (267) 出土遺物  
 図14 土壙 SK09出土遺物  
 図15 土壙 SK10 (304~310)、SK11 (311~324)、  
     SK12 (325~328) 出土遺物  
 図16 土壙 SK13 (329~341)、SK14 (342) 出土遺物  
 図17 土壙 SK15出土遺物  
 図18 土壙 SK16 (360~381)、SK17 (382~391)  
     出土遺物  
 図19 土壙 SK17出土遺物

- 図20 土壙 SK18-A (396~402)、  
     SK18-B (403~409)、  
     SK18細分以前一括 (410~423) 出土遺物  
 図21 土壙 SK18-C 出土遺物  
 図22 土壙 SK18-C (450)、  
     SK18-D (451~460) 出土遺物  
 図23 土壙 SK19出土遺物  
 図24 溝 SD01出土遺物  
 図25 溝 SD04 (497~504)、SD05 (505~509)、  
     SD06 (510~513)、SD02 (514~516)、  
     SD07 (517~520) 出土遺物  
 図26 溝 SD08出土遺物  
 図27 溝 SD09出土遺物  
 図28 溝 SD09出土遺物  
 図29 溝 SD09出土遺物  
 図30 溝 SD09出土遺物  
 図31 井戸 SE01・07・09側面+見透し断面図、  
     SE10~15平面図  
 図32 井戸 SE01 (710~719)、SE02 (720~725)、  
     SE03 (726~729)、SE04 (730~741)、  
     SE05 (742~744) 出土遺物  
 図33 井戸 SE06 (745~762)、SE07 (763~774)  
     出土遺物  
 図34 井戸 SE08出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	とくしまいやうぶんかざいはっくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	勝浦康守
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 088-621-5418
発行年月日	西暦 2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村	北 緯 緯度。' "	東 綏 経度。' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
徳島城下町跡	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 中前川町	36201	-	34度 4分 47秒	134度 33分 11秒	20020501～ 20021031	1,500	校舎改築工事に 伴う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳 島 城 下 町 跡	城下町跡	近 世	土壙・井戸・溝	陶磁器・瓦 木製品 金属器 動物遺体	

## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境（図1・2）

天正13（1585）年、阿波国の領主となった蜂須賀家政は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。徳島城下町の特徴は、徳島城が築かれた標高61mを測る城山が位置する徳島を中心とした旧吉野川下流域のアルタ地帯の島状微高地を利用した島昔請である。今回の調査地である徳島市中前川町3丁目に所在する徳島市徳島中学校付近は、徳島城が築かれた徳島の北側を流れる旧助任川の左岸にある。徳島の周囲には石垣（徳島城惣構石垣）が築かれるが、前川では常三島などと同様に周囲に土手がめぐらされる。当初、前川は土手で囲まれた小範囲な武家地であるが、寛文5（1665）年の「阿波国渭津城之図」では土手の外側にまで屋敷地化が進んでおり、続く天和～元禄期においてもその傾向はとどまらず、特に、徳島城西ノ丸～瓢箪島・出来島の対岸にあたる旧助任川沿いでの屋敷地の拡充が著しい。そして、旧新町川～助任川沿いに新たな土手がめぐらされることにより、前川は二重の土手で囲まれた形態となる。藩政時代から昭和10（1935）年頃までに徳島市街地において呼称されていた地名や町名をあらわした「徳島市街地名町名図」の前川周辺には、土手ノ丁（内側土手）・南土手ノ丁（外側土手）の記載があり、かつて存在した二重の土手が丁名として継承されている。なお、呼称命名の始まりは、土手ノ丁が1812（文化9）年12月、南土手ノ丁は1906（明治39）年5月である。

安政年間（1854～1860）の御山下島分絵図・前川助任では、内側の土手の中では、五島太兵衛・林宇兵衛・森久兵衛・長江佐蔵・中村伴助らの名前がみられる。いずれも150～400石の高取藩士であるが、蜂須賀正勝・家政と縁のある名家であることが『徳島藩士譜』の家系譜からわかる。

五島太兵衛は五島家7代（250石）で御城山番・東御殿御番・銀札場御奉行を勤める。初代の森久左衛門は徳島藩中老で阿波水軍を率いた森甚太夫家（2000石）2代氏純の弟である。

林宇兵衛は林家11代（150石）で福良御番・長谷川相模組を勤め、初代の林団書助は徳島藩家老（5500石）で川島城代である。林家は当初より前川に屋敷地を拝領していたわけではなく、10代林五郎兵衛の屋敷替に伴い前川に移る。

森久兵衛は森家12代（400石）で奥小姓役・定御使番・規五郎様附人・御城山番を勤め、初代の森監物（5500石）は西條城代で、正勝が尾州より召出した経験がある。

長江佐蔵は長江家5代（250石）で奥小姓役・西ノ丸御番・御作事奉行・御藏奉行勘定方を勤め、初代の長江権作は長江縫殿貞韶の弟である。長江縫殿貞韶は長江家5代で、初代の長江刑部丞（5000石）は土司頭で、天正13（1585）年家政とともに阿波に入国する。

中村伴助は中村家10代（200石）で、北御藏奉行・新藏御奉行を勤め、初代の中村小左衛門も天正13（1585）年、家政とともに播州より入国する。

一方、内側土手の外側では格付けの低い無足や無格者の屋敷、屋敷主のいない建屋、町人地もみられ身分階級による居住地の区別が明確にされる。また、元禄4（1692）年の御山下絵図で、前川の内側土手内の屋敷地には「スレ」「スレ屋敷」の付紙が8箇所にみられる。これは、断絶、転任、致仕などの理由により返上された屋敷地とされるが、元禄5（1694）年の「御山下屋敷略図」では、「スレ屋

敷」に屋敷主が記載されていることから屋敷替により藩士が居住していることが示されている。

今回の調査地は安政年間の絵図では、前川に当初築かれた土手の内側に位置し、徳島藩士の森田吉之進（森田家9代、315石2斗、御作事奉行・奥小姓役）・福家太郎右衛門（福屋家11代、200石、福田雅楽組）・三澤十左衛門（三澤家8代、300石、御蔵奉行勘定方・規五郎様附人、福田雅楽組）の屋敷地にまたがっていることがわかる。ただし、天明年間（1781～1789）に描かれた「御山下画図」では、森田吉之進屋敷には福屋甚太兵衛（福屋家7代、328石余、御城山番・御使番役・裁許御目付・江戸御留守居役）・三澤十左衛門には林徳左衛門（林家4代、400石、西尾兵馬組）の屋敷地であることから、両屋敷については屋敷替が行われている。なお、林徳左衛門については、文化3（1806）年に「禄・家屋敷被召上」の記録がある。

このように、城下町跡・前川は当初、小範囲の武家屋敷地であるが、藩政時代の当初より蜂須賀正勝・家政と関わりのある人物の屋敷を配置するなど、徳島城の北側に位置する重要な地域であったと考えられる。



図1 調査地の位置と周辺（安政年間）

## 第2章 調査の結果

第1節では層序の概要を記し、第2節以降で検出された遺構と遺物について示していく。

調査地は徳島藩士の三つの屋敷地を跨る配置であり、廃棄土壌や井戸などの遺構が集中する屋敷界付近とこれらの遺構が全く確認されない箇所がみられる。屋敷内における整地の在り方を考慮すれば、屋敷内の建物部と周縁部との土地利用の状況が明確に示されているものと考えられる。

城下町跡における遺構・遺物の在り方の特徴の一つとして、遺構の複雑な重複と遺構・遺物の数量的な多さがあげられる。特に、屋敷地内における物資の廃棄関係遺構は、同一場所における廃棄の連続性を示す重要なものであるが、遺構検出と一括資料としての遺物取り上げの難しさが絡み合ってくる。今回の調査でも、屋敷界付近での廃棄行為は頻繁であり、遺構検出時の先後関係が充分に把握できない場合が多い。また、井戸が多数確認されている。井戸側には竹製の籠だけが残存しているものが多くみられ、桶積み上げと考えられるが井戸側材が残存しない。なお、検出遺構と出土遺物については、良好な資料に限定し提示する。



図2 調査地の配置と絵図（安政年間：S=1:5,000）

## 第1節 層序の概要(図3)

調査地周辺の標高は、T.P.+1.7mである。現代盛土および搅乱(第1層)以下、第2~6層が堆積する。以下、上位より概略する。

第0層：層厚30cmのグランド用サンドである。

第1層：層厚60~100cmの現代盛土および搅乱である。

第2層：層厚15cmの旧耕作土で、福屋家屋敷東~森田家(旧:福屋家)屋敷にかけて堆積する。

第3層：層厚20~30cmの淡黄色シルトと灰色細~粗砂の混在で、屋敷整地層である。

第4層：層厚30~40cmの灰白色粘土質シルトと暗灰黄色砂質シルトの混在層に灰色砂質シルトがサンドウイッチ状に挟在する。硬く敲きしめる丁寧な整地法であり、特に、福屋家屋敷中央付近でみられ、屋敷地全域に広がるものではない。屋敷内に建物を構える際の整地法として、屋敷の表側の部分で限定的に行われる整地と考えられる。

第5層：層厚10~30cmのにぶい黄橙色砂質シルトで、福屋家東側~森田家(旧:福屋家)西側にかけて堆積し、屋敷内の建物部以外での整地に伴う堆積土と考えられる。

第6層：浅黄色~明青灰色粘土質シルトの遺構検出ベース層である。1.5m程度の層厚がみられ、下位で砂層へ変化する自然堆積層である。旧吉野川下流域の低位湿地帯においてはシルト層の堆積厚が比較的良好であり、武家地前川を整備する上で地形的な条件が整っていた地域であると考えられる。

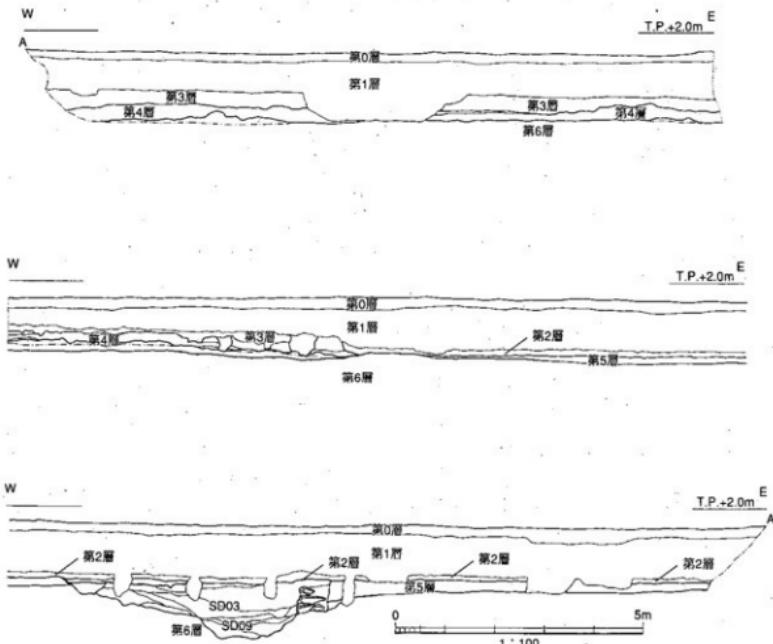


図3 北壁断面図(部分)基本層序

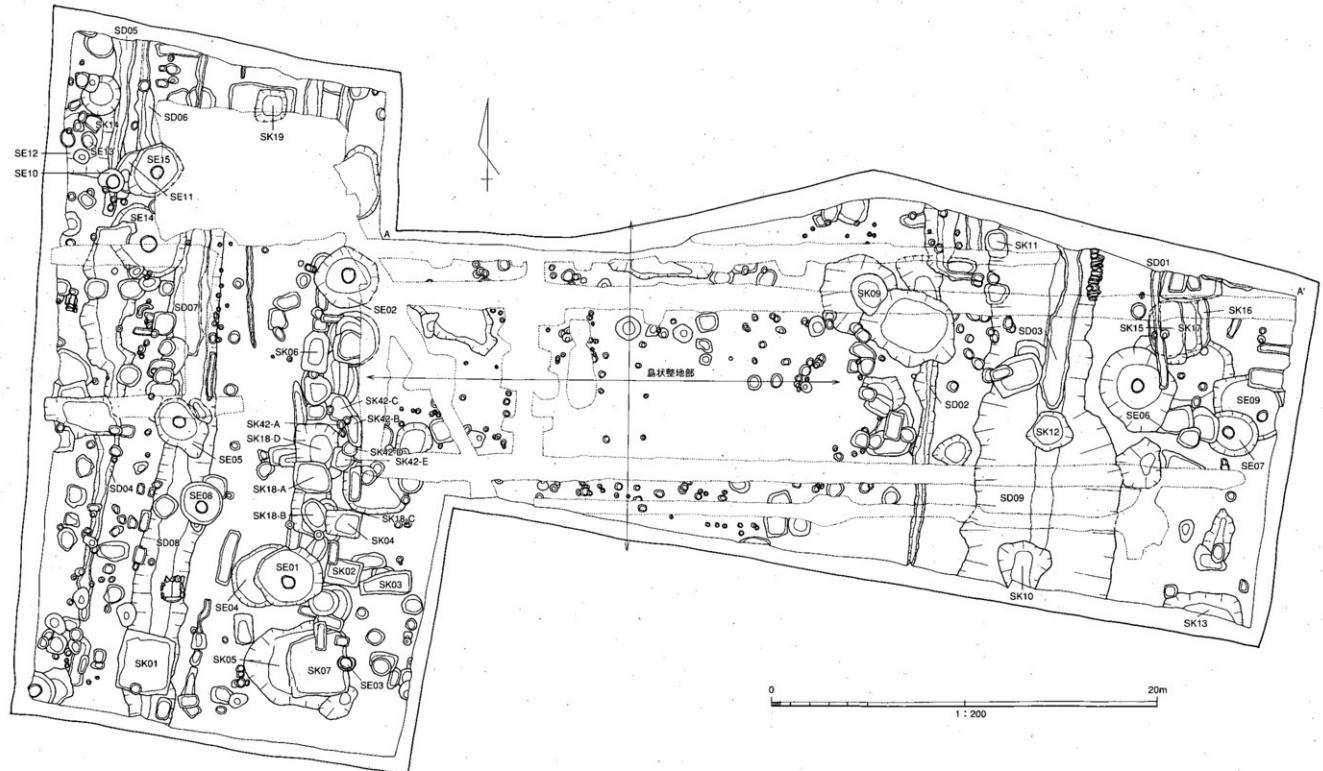


図4 遺構配置図

## 第2節 遺構と遺物

第6層上面において江戸時代の徳島藩士の屋敷に関する一切の遺構と遺物を検出している。本来、各整地ごとの生活面上における遺構・遺物の検出が望ましいが、整地土が均一でなく遺構検出の難しさに対する対処である。ただ、この方法においても、遺構重複の複雑さから生ずる各遺構の掘り分けと遺物の取り上げについては容易でない場合がある。

検出遺構には徳島藩士の森田家（旧：福屋家）、福屋家、三澤家（旧：林家）の屋敷内で確認した、土壙・溝・井戸・ピットがある。

### 1) 土壙 SK01（図4～6、図版3・10～13）

福屋家と三澤家（旧林家）の屋敷界溝SD08と重複する土壙である。長辺3.2m、短辺2.9mの平面形がほぼ方形を呈し、深さは80cmを測る。大量の瓦を主体に陶磁器が混在するいわゆる大型方形の瓦廐棄土壙である。屋敷界溝SD08を切り込んでいるため、SD08埋没以降の屋敷界の指標遺構が移動しているか、もしくは屋敷界の指標遺構が明確化されず、廐棄場としての空間に変容している可能性がある。

出土遺物には肥前系磁器碗1～10・18～20・紅猪口11・紅皿12・坏13～17・蓋28～33・皿40・41・鉢43、中国製磁器皿42、京信楽系碗21～27・蓋35・38・39・鍋48・火入れ51・急須55・56、產地不明陶器蓋34・36・37、土師質用途不明品52・59・60、備前灯明受付皿44・45、加工円盤46・47、瀬戸美濃系陶器壺50・鉢58・植木鉢49、羽釜53、焙烙54、大谷焼鉢57、硯61、十能62、漆器蓋63がある。19世紀前～幕末である。

1～10は染付である。1は高台内に一重圏線内「大明年製」銘、豊付無釉である。2は口縁部内面に屈輪文、3は見込みに一重圏線内に「壽」、豊付無釉で離れ砂が付着している。4は見込みに二重圏線内にコンニャク印判による五弁花纹、蛇ノ目釉剥ぎが施され、重ね焼きの痕跡がある。5は青磁染付で、底部外面に二重方形枠内渦福、口縁部内面に四方擗文、見込みは一重圏線内に手描き五弁花纹、豊付無釉で離れ砂が付着している。6・7はハの字高台で口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圏線内に文様、豊付無釉である。8は口縁部外面に四方擗文、9・10は広東碗である。

11・12は白磁で、12は外面に貝の放射脈をあらわした型押成形である。13・15・16は染付、14は色絵である。17は外面鎬文で、高台無釉である。

18・19は染付で、豊付無釉である。20は外面に灰釉をかけ、白泥と鉄釉の梅、内面は白色釉をかけ、豊付無釉である。

21・22は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、高台無釉である。23・24は注連繩文碗で、23はウラジロ葉柄が赤色、ウラジロ葉は消色している。25～27は小杉碗で、高台無釉である。

28～32は染付で、28は口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圏線内に手描き五弁花纹である。30～32はハの字高台で、口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圏線内に文様である。33は染付で、口縁部内面無釉である。



図5 土壙SK01出土遺物

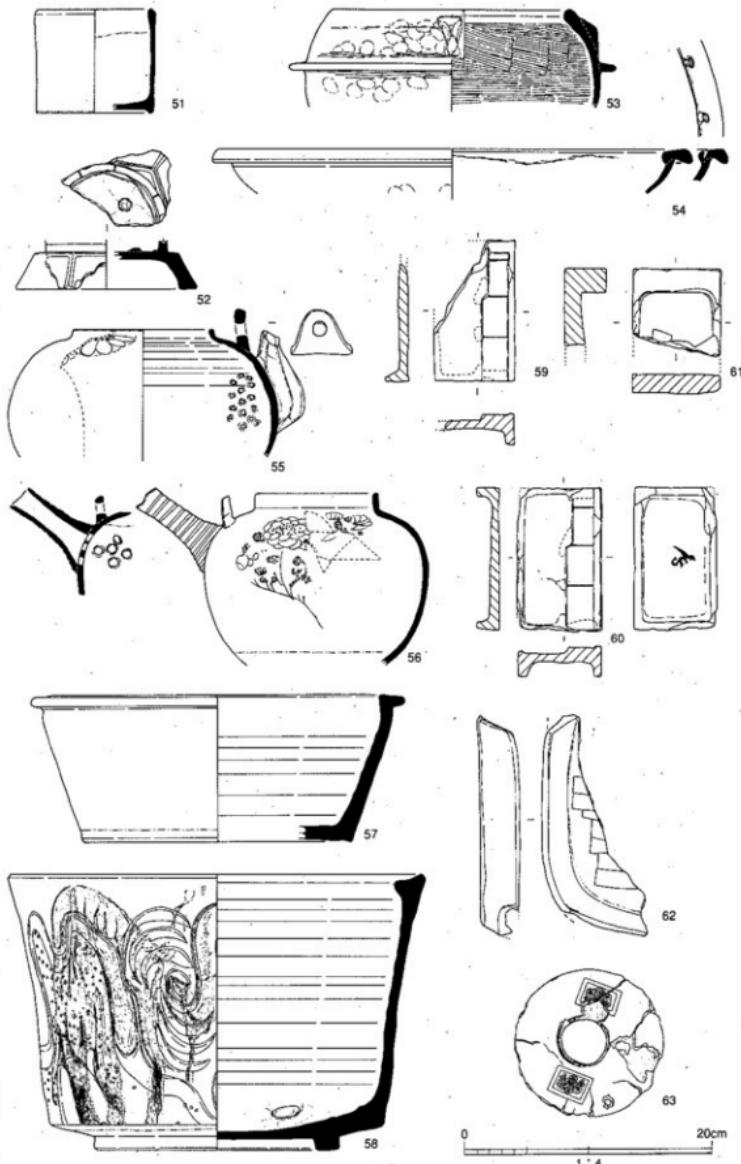


図6 土壌SK01出土遺物

34・35は土瓶の蓋で、34は外面に褐色釉、35は外面に灰釉、いずれも内面無釉で底部外面に同心円状のケズリ痕がある。36は急須の蓋で、底部に回転糸切り痕がある。37は口縁部内面無釉で、外面に鉄釉による2条帶線を廻す。38は合子の蓋で内面無釉、39は水注の蓋で摘みが剥がれている。

40~43は染付で、40は輪花型打成形の口説で、壘付無釉である。41は蛇ノ目凹形高台で離れ砂が付着している。42は壘付無釉である。43は壘付無釉、見込みは二重圓線内にコンニャク印判による五弁花纹である。

44・45は仕切りに切れ込みを入れ、底部外面は回転糸切り痕である。46・47は瓦素材で、46は片面から穿孔を施しているが貫通していない。

48は灰色の硬質胎土に灰釉をかける。49は口縁部外面から黒褐色をかけ流す。50は口縁部から外面に灰釉をかけ口縁部端面は無釉、肩部に双耳を貼り付ける。51は口縁部から外面に白色釉をかけ底部は無釉、底部内面に離れ砂が付着している。52は雲形成形の脚台を有し、切り込みによる窓をもつと考えられる。

53は瓦質で、内面ハケである。54は折縁形の口縁部を呈し、内耳には貫通しない2孔が穿たれる。

55の注口は鶴首状で、外面は灰釉をかけ、内面無釉である。56は外面に白泥を塗りイッテンによる花文、注口には渦巻の線刻を施す。底部外面は無釉である。57は内外面に褐色釉をかけ、底部外面は無釉である。58は外面にヘラ彫り刺突の文様を施し内外面に灰釉をかけ、外面には緑釉をかけ流す。見込みに6箇所の目跡がある。59・60は上側面にミガキ、側面に赤色塗彩痕がある。62は瓦質である。63は内外面に黒色漆を塗り、外面2箇所に蒔絵（金色）で五三の桐文を配す。

## 2) 土壤 SK02~08 (図4)

福屋家屋敷の西側において遺構が集中的にみられる箇所で検出した土壤である。SK02~04は平面形が長方形を呈し、長辺1.9~2.7m、短辺1.1~1.4m、深さ50~60cmを測る廃棄土壤で形状が整っている。SK07は平面形が長辺2.6m、短辺2.2mのはば方形を呈し、深さ70cmを測る瓦を主体とした廃棄土壤であるが、遺物検出ブラシに不整な箇所がみられることから、部分的に小規模な土壤が切り合っていると考えられる。SK05はSK07と重複する古相の土壤である。SK08は遺構検出時での細分ができるず、掘削過程において細分が可能になった遺構であり、同一箇所での小規模な掘削が短期間の内に繰り返し行われた典型的な事例である。遺構は底部下位まで掘削を進行させることで細分が可能となるため、上位での遺物については一括資料としての取り扱いに支障を残す。

### ①土壤 SK02 (図7・8、図版4・13~17)

出土遺物には肥前系磁器壺64~67・碗68・69・皿76・仏花瓶88・水滴91、京信楽系碗70、灯明皿83・84、灯明受付皿85・86、瀬戸美濃系磁器碗71~73・皿75・77、瀬戸美濃系陶器碗74・鉢93・皿94・95、ミニチュア蓋78、産地不明陶器蓋79~81・瓶89、大谷焼蓋82・徳利96・灯明具97・98、備前瓶87、植木鉢90、用途不明土製品92、泥面子99~108、煙管雁首109、木簡110~114、漆器蓋115・碗116、曲物117、糸巻118、栓119、小柄120、滑車121、下駄122がある。19世紀前~幕末である。

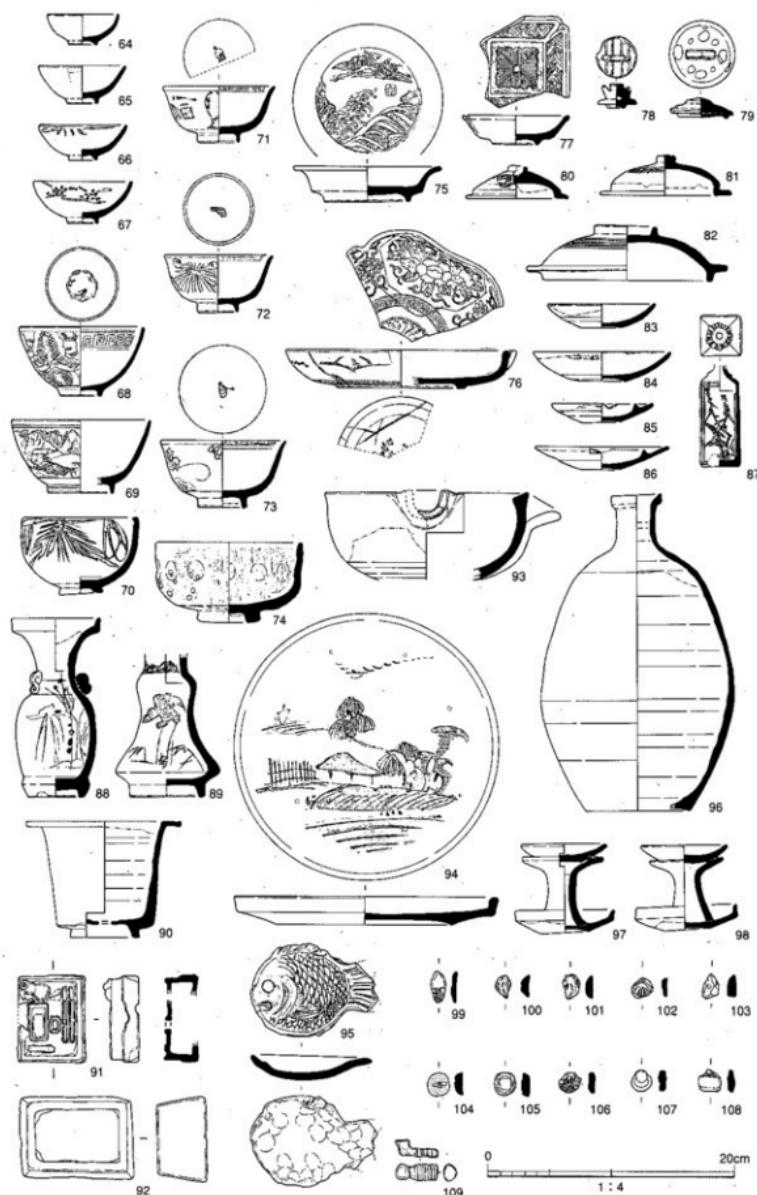


図7 土壌SK02出土遺物

65~67は染付である。68・69は染付で、68は口縁部内面に雷文、見込みは二重圓線内に環状松竹梅文である。70は簡素化された鉄絵の注連縄文で、高台無釉である。71~73は染付の端反で、口縁部内面に1条帶線を廻し、見込みは1条もしくは2条圓線内に文様を描く。

74は灰白色の硬質胎土に鉄釉をかけ高台無釉であるが、高台内に施釉する。体部外面に指頭によるえくぼ状の窪みを廻し、長石釉を散らす拳骨茶碗である。

75・77は染付で、77は型押成形、76は型打成形の色絵染付で、76は焼継痕と底部外面に透明書の記号がある。78・79は外面に柿釉を施し、79は白泥で斑点を付ける。80・81は外面に2条帶線を廻す行平鍋蓋で、81は白泥による文様を施す。いずれも内面には灰釉をかける。82は土瓶の蓋で、外面に鉄釉をかけ内面無釉、外面にはカキ目が施される。

83・84は内面に灰釉をかけ、外面無釉、見込みにハリ目跡があり、口縁部に灯芯油痕がある。85は透明釉、86は灰釉を内面にかけ、外面無釉である。

87は角瓶で、口を欠損し側面にヘラ掘りの草花文を施す。88は染付で、頸部下位に双耳、豊付に離れ砂が付着している。89は灰釉をかけ、綠釉と鉄釉で文様を施す。

90は口縁部から外面に鉄釉をかけ内面および高台無釉、底部内面に火摺痕がある。91は書道用具

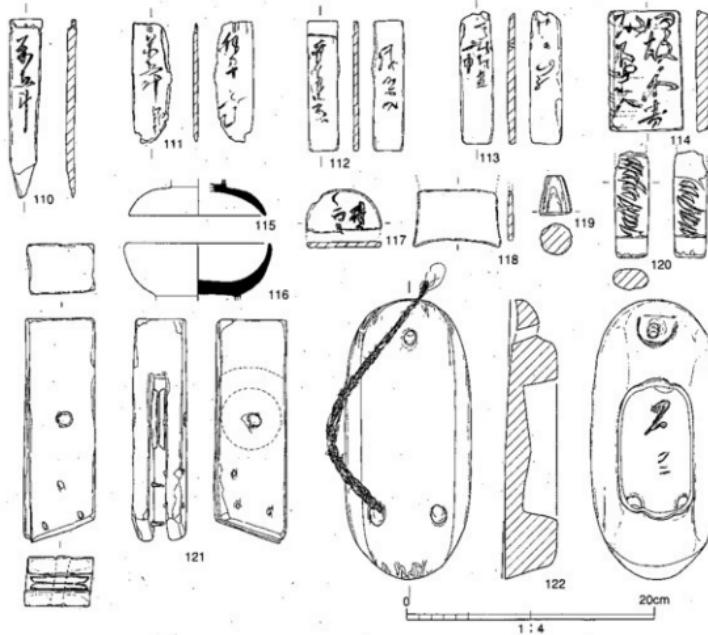


図8 土壌SK02出土遺物

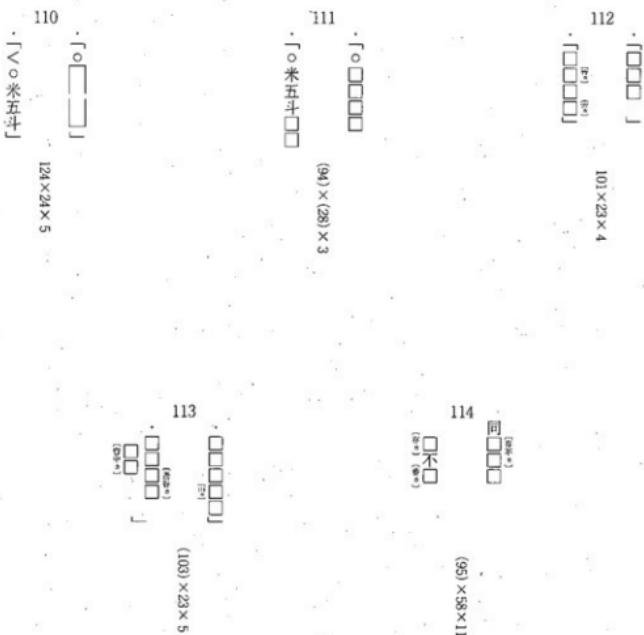
を表現している。92は台形枠状を呈し、外面はミガキを施す。

93は灰釉をかけ、口縁部からU字状の切り込みを入れ注口を貼り付け、底部外面はヘラケズリが施される。94は灰釉をかけ、鉄絵の行灯皿である。内面に8箇所のハリ目跡がある。95は型押成形で、内面に鉄釉をかける。96は口縁部から外面に鉄釉をかけ、底部無釉である。97・98は鉄釉をかけ底部外面無釉、皿受けの仕切りに1箇所切り込みを入れる。

99~104は型押成形で99はイカ、100・101は魚、102は貝、103は筍、104は人面、107は釣り手を表現している。

110・111は荷札木簡である。米五斗の記載があることから、福屋家の所領地から年貢米として送られたことを示すものである。

115・116は内外面に黒漆、117は墨書がみられる。120の基端部は黒漆、握手部は赤漆を塗る。121は木製の滑車、122は底を雲形に削り墨書がある。



②土壤 SK03 (図9、図版18・19)

出土遺物には肥前系磁器碗123・125・猪口126・蓋130・徳利140、瀬戸美濃系磁器碗124・127～129、蓋131・皿134・135、瀬戸美濃系陶器坏136・137、京信楽系蓋132・133・灯明受皿138・徳利139・水注141・土瓶142・鉢143、下駄144・145がある。19世紀前～幕末である。

123・125は染付で、123は口縁部内面に雷文、見込みは二重圓線内に環状松竹梅文、125は口縁部内面に雷文、見込みは二重圓線内に文様、焼継痕があり高台内に透明書の記号がある。124は染付

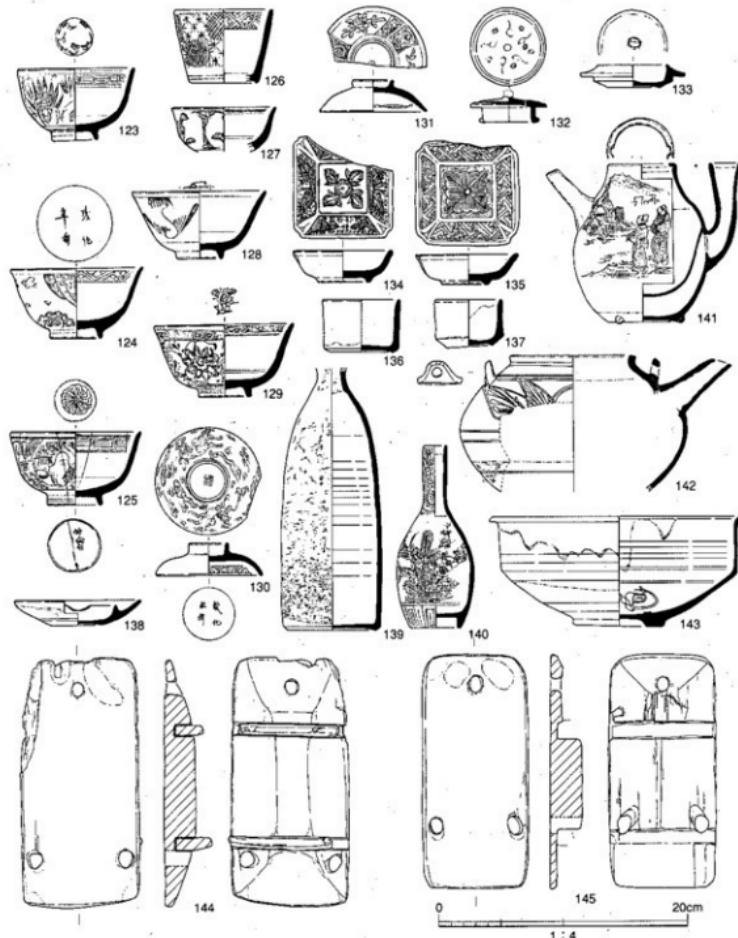


図9 土壤 SK03出土遺物

の端反で、口縁部内面に四方襷文、見込みは一重圓線内に「成化年制」銘である。126は染付で、口縁部内面に四方襷文、127~129は染付の端反で、129は全体に青味がかっている。

130は口縁部内面に四方襷文、見込みは一重圓線内に「成化年制」銘である。131は色絵である。

132は白化粧土に綠釉と鉄釉の捺子文を施し、蓋身を上下に小孔で貫通する。内面には蓋合わせ用の2箇所の小突起を貼り付ける。133は外面に灰釉をかけ、内面無釉である。134・135は型押成形で、見込みに花文陽刻が施される。136・137は黄白色の硬質胎土で、136は灰釉、137は鉄釉をかけ、底部外面無釉である。138は灰色の硬質胎土で灰釉をかけ、仕切りに浅い凹状の切り込みを入れ、外面無釉である。139は綠釉と白色釉をかける。140は染付の御神酒徳利である。

141は白化粧土に綠釉と鉄釉で風景を描き、底部に三足を貼り付ける。内部は中空の上下二重構造であり、把手が下部への注取水口を兼ねる。口縁部には蓋合わせのための切り込みが2箇所ある。口縁部上端は無釉、底部外面には白泥を塗る。蓋132とセットである。

142は灰釉をかけ、外面は白イッチンかけである。143は灰釉をかけ、見込みに白イッchinかけの文様を配し、5箇所の胎土目跡があり底部外面無釉である。144・145は角型の無限下駄である。

### ③土壤 SK04 (図10、図版20)

出土遺物に肥前系磁器碗146~149・鉢150・香炉151、京信楽系碗152・皿153~155・花生159、土師質皿156・157、備前皿158、秉燭160、加工円盤161、産地不明陶器土瓶162、チャート製火打ち石(写真163~171)がある。18世紀末~19世紀前葉である。

146は白磁、147は赤絵、148は染付、149は青磁染付である。148は内外面に連続する龍を描き、

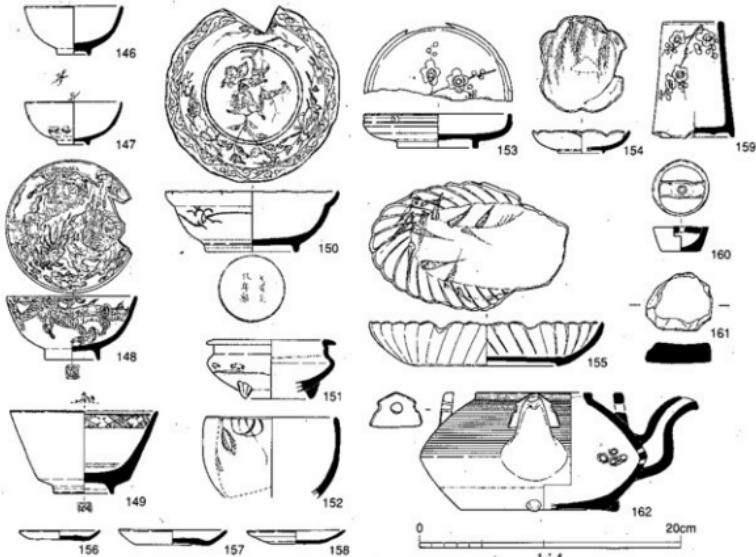


図10 土壤 SK04出土遺物

149は口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圓線内に手描きの五弁花文である。150・151は染付で、150は輪花型打成形で口銘を施し、高台内は一重圓線内に「大明成化年製」銘である。

152は注連繩文で、縄は赤色、ユズリハは緑色である。153は黄白色の硬質胎土に灰釉をかけ、高台無釉、見込みには白色釉・青色釉・鉄釉で梅を描く。154は型打成形で高台無釉、内面には青色釉・鉄釉で柳を描く。155は型押成形で、基筒底状の高台で高台無釉、内面には青色釉・鉄釉で笹を描く。159は灰釉をかけ、外面には白色釉・青色釉・鉄釉で153と同じ意匠の梅、口縁部上端と底部外面は無釉で、高台に雲形の切り込みを3箇所入れる。

160は土師質で、橋渡しを上下に貫通する孔を穿つ。孔の周囲に灯芯油痕がある。161は瓦素材の加工円盤である。162は淡橙色の硬質胎土に鉄釉をかけ、口縁部端面および底部外面は無釉、底部に足を貼り付け、外面にはカキ目がある。

#### ④土壤 SK05 (図11、図版21・22)

出土遺物には肥前系磁器碗172～175・皿184・香炉180・182・壺181、肥前系陶器碗176～178・183・皿185、京信楽系統179、產地不明陶器蓋186、瀬戸美濃系陶器碗187・漫瓶191、徳利188、煙管雁首189、土人形190、土師質皿192～204、加工円盤205・206、備前播鉢207、漆器蓋208、木簡209、チャート製火打ち石（写真210～213）がある。18世紀前～中葉である。

172・173・175は染付で、172は高台内に「大明年製」銘、175の見込みは二重圓線内に手描き五弁花文、高台内は一重圓線内「大明年□」銘、174は青磁染付で、口銘を施し高台内は「大明年製」銘である。

176は外面に白泥による花文、177・178は内外面に白泥による刷毛目を施す。179は灰釉をかけ、鉄釉で花文を描き、高台無釉である。

180・181は染付で、180は口縁部外面に四方擗文、181は雨降文である。182は青磁で、内面および疊付無釉である。183は内外面に白泥をかけ疊付無釉、体部中位に大きな窪みが廻る。184は染付で、見込みは手描き五弁花文を施す。185は灰釉をかけ、口縁部に沈線が廻る溝縁皿で、高台無釉、見込みには胎土目跡がある。

186は外面に鉄釉をかけ、橋摘みは欠損し、底部外面に回転糸切り痕がある。

187は天目碗、188は油徳利の欠損品、190は鶏である。

191は灰色の硬質胎土に黄褐色釉をかけ高台無釉、把手付近から白色釉をかけ流す。

192～204の底部外面は回転糸切り痕であるが、196・199・202・203の底部外面には簀の子状の圧痕がみられる。196～198・200～203の口縁部には灯芯油痕がある。205・206は瓦素材である。

207は外縁帶の張り出しが弱く、口縁部外面に2条沈線、口縁部内面に低い突帯が廻る。播目は上位から見込みまで連続する。

208は外面は黒漆で、三方に紋を入れ、内面は赤漆を塗る。

209は護摩札で、宝永（1704～1711）の紀年銘である。

209  
■□奉修大益柴燈護摩供  
宝永×  
災

(370)×(50)(5)



図11 土壌 SK05出土遺物

⑤土壤 SK06 (図12、図版23・24)

出土遺物には肥前系磁器碗214・216・蓋物215・皿218・225・227・坏219・220、肥前系陶器碗217・222、京信楽系蓋221・碗223・234・香炉226、備前灯明受皿228・鉢234、土師質皿229～231、土師質坏232、加工円盤233、焰烙235・236がある。18世紀前～中葉である。

214～216は染付で、214は雨降文、215は口禿である。217・222は陶胎染付で、217は口縁部外面に四方櫛文を施す。219・220は染付、225は見込み蛇ノ目剥ぎで、高台無釉である。

221は合子の蓋で、上絵を施すが一部消色している。223は灰色、224は黄白色の硬質胎土に灰釉をかけ上絵を施し、高台無釉である。226は型打成形で、黄褐色の硬質胎土に灰釉をかけ上絵を施し、底部は基筒底状で無釉である。

218・227は染付で、218は口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内に手描き五弁花文、高台内は二重方形枠内渦福である。228は仕切りに切り込みが入る。

229～231は底部外面は回転糸切り痕があり、229は底部に穿孔が施される。232は内面に赤色塗彩痕がある。233は瓦素材である。

235は底部から直立する口縁部、236は型作りの体部に折縁形の口縁部を呈し、体部外面は指頭圧痕が顕著である。235の内耳には上下に貫通しない孔、236は貫通する孔が穿たれる。

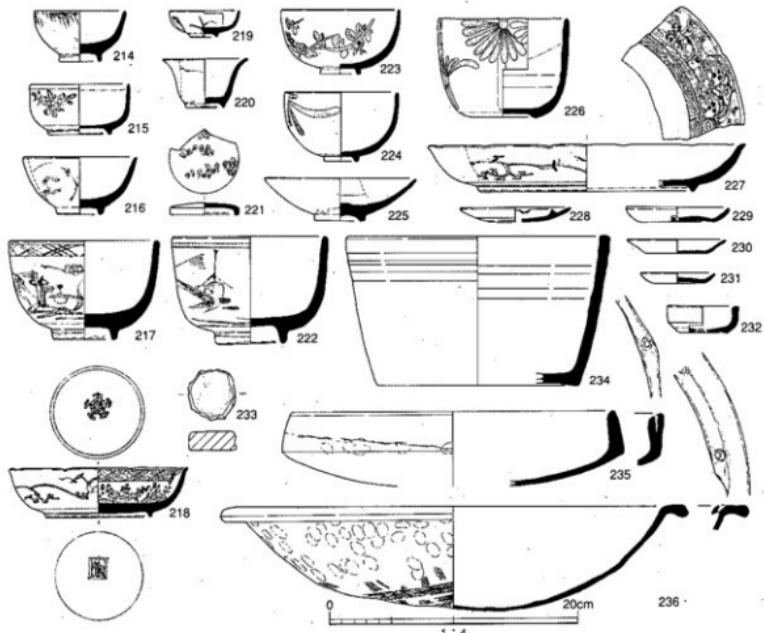


図12 土壤 SK06出土遺物

#### ⑥土壌 SK07 (図13、図版3・24)

出土遺物には肥前系磁器碗237～240・紅皿242・坏245・蓋246、京信楽系碗241、瀬戸美濃系陶器坏243、用途不明陶器244、備前灯明受皿247・248、土師質皿249～252、土製品253、碁石254、加工円盤255、木釘256がある。18世紀前～中葉である。

237～239は染付で、237は高台内に「大明成化年製」銘、238は見込みは二重圈線内手描き五弁花文、高台内は「大明年製」銘、239は内外面に連続する龍を描く。240は灰釉をかけ高台無釉である。241は灰釉をかけ上絵を施す。242は外面に貝の放射脈を表現し、高台無釉である。243は灰釉をかけ、底部は碁盤底状である。245・246は染付で、246は外面にコンニャク印判による桐文を配す。247・248は仕切りに3箇所の切り込みを入れる。249～252は底部外面は回転糸切り痕があり、252は口縁部に灯芯油痕がある。253は亀、255は瓦素材である。

#### ⑦土壌 SK08 (図13、図版4・25・26)

遺構検出時は単一遺構として捉えたが、掘削を進める過程において小土壤群 (SK08-A～J) として細分した遺構である。遺構細分以前の出土遺物として肥前系磁器碗257・258、京信楽系碗259・260、土人形261があるが一括としての信頼性に支障がある。また、細分後の出土遺物として、SK08-Aより肥前系磁器蓋264、SK08-Bより肥前系磁器碗265、SK08-Cより肥前系磁器坏262、京信楽系灰落し263、SK08-Dより肥前系磁器碗266、SK08-Eより肥前系磁器小坏269・碗270・皿271・蓋272・273、京信楽系碗268、瀬戸美濃系鉢274、風炉275、丹波窯276、擂粉木棒277、SK08-Fより京信楽系碗267がある。

##### SK08細分以前一括

257・258は染付で、257は雨降文、258の外面は蜻唐草文に花文を配し、口縁部内外面に四方擗文、高台内に「□貴長春」銘である。261は女人立像で底部から穴をあける。259は注連繩文とセットの海老が色絵＋鉄絵で描かれ、高台無釉である。260は灰釉をかけ、外面は亀甲形の型打成形である。

##### SK08-A～F

262・265は染付、263は型打成形で、灰釉をかけ上絵を施し、高台および内面は無釉、高台内に墨書がある。底部穿孔を施し植木鉢に転用している。264は蓋物の蓋で、外面にコンニャク印判による桐文を配し、口縁部内面無釉である。266は染付、267は小杉碗、269は染付で、外面にコンニャク印判による文様、270は染付の筒形碗、271は染付で、内面は蜻唐草文に花文を配し、外面は唐草文である。疊付無釉で高台内に「大□□□」銘、ハリ目跡がある。272・273は染付で、272は蓋物の蓋で、橋摘みを貼り付け口縁部無釉、273は見込みは一重圈線内に「壽」字である。274は灰釉をかけ高台無釉、見込みには目跡がある。275は口縁部からU字状に切り込みを入れ火窓とし、脚部正面には孔が穿たれているが貫通していない。体部後方に数個の通気用の小孔があり、底部内面および体部内面上位に煤の付着がみられる。276は外面に鉄釉をかけ、口縁部上端面および体部外面にカキ目を施し、肩部に輪状の粘土紐を貼り付け釣手を表現している。277は基部に紐通しの孔が横位に穿たれている。19世紀代である。

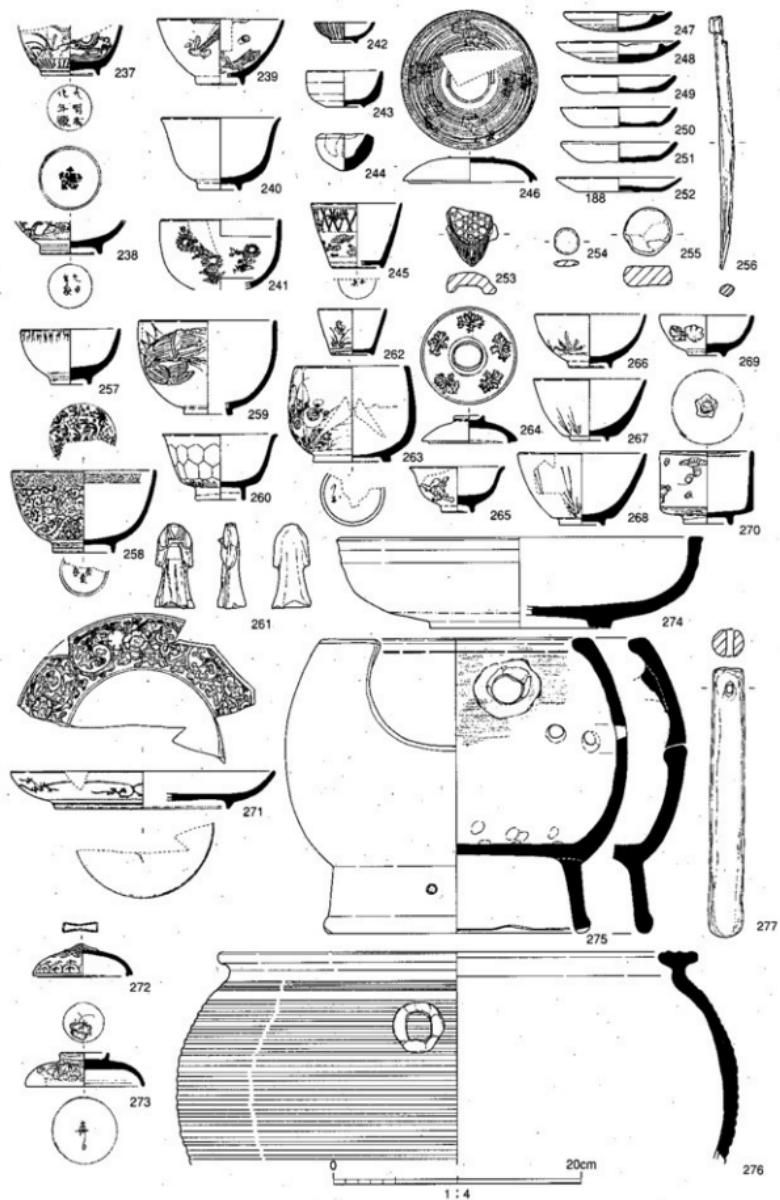


図13 土壌SK07(237~256)、SK08細分以前一括(257~261)、SK08-A(264)、SK08-B(265)、SK08-C(262~263)、SK08-D(266)、SK08-E(268~277)、SK08-F(267)出土遺物

### 3) 土壌 SK09~12 (図4)

福屋家屋敷の東側および福屋家～森田家（旧：福屋家）屋敷界で検出した土壌である。SK09は平面形が長径2m、短径1.7mの不整長円形を呈する瓦が主体となる廃棄土壌である。SK10・11は福屋家と森田家の屋敷界溝（SD09）と重複する造構であり、かつて屋敷界を指標した造構が存在した場所に、後世全く性格の異なる造構がみられる。福屋家と三澤家の屋敷界で確認されている土壌 SK01と同じ事象がこの屋敷界においても認められることから、屋敷界を標識する造構設定の意識が変容している可能性が考えられる。

#### ① 土壌 SK09 (図14、図版27)

出土遺物には肥前系磁器碗278～283・290・291・坏284～287、蓋292・293、瀬戸美濃系磁器碗288、瀬戸美濃系陶器鉢303、京信楽系碗289・合子294・295・鍋298、產地不明陶器蓋296、ミニチュア土瓶297・硯300、秉燭299、金属製品301、堺明石系擂鉢302がある。19世紀前～幕末である。

278～283・290は染付で、283は口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内に手描き五弁花文、高台内に渦福、290は端反で焼継痕がある。284は赤絵、285は白磁、287は染付で、見込みに亀を描く。288は染付の端反である。

289は灰色の硬質胎土に灰釉をかけ、外面に白イッチンによる「壽」字、疊付無釉で見込みに3箇所のハリ目跡がある。

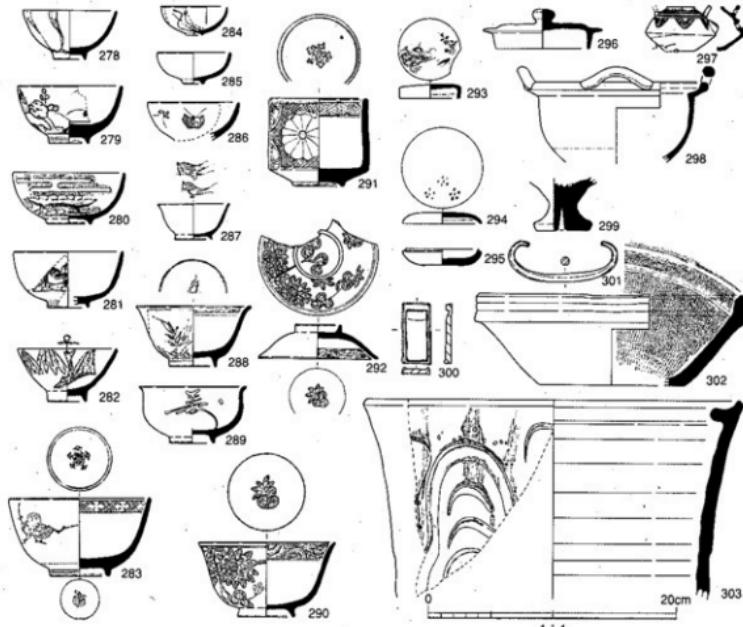


図14 土壌 SK09出土遺物

291は染付の筒形碗で、外面に菊花文を配し、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内に手描き五弁花文である。292は染付で、碗290と文様構成が同じである。293は染付の合子の蓋で、口縁部無釉である。294・295はセットで、外面には鉄釉による文様、底部外面中央は無釉である。

296は外面に鉄釉をかけ、内面無釉である。297は土瓶のミニチュアで、外面に黄土色釉をかけ体部下半は無釉で墨書があり、三足は円形の刺突文で表現する。298は内外面に鉄釉をかけ、口縁部に把手を貼り付け、底部無釉である。299は橙色の軟質胎土に鉄釉を塗り、底部中央に串で固定用の小穴を入れる。300は土師質の硯、301は銅製の把手である。302は外縁帯の張り出しが強く、口縁部内面に幅広の突帯が廻り、擂目の上端はナデで揃えられる。303は内外面に灰釉をかけ、外面にヘラ彫りの文様を施す。

#### ②土壤 SK10 (図15、図版28)

出土遺物には、肥前系磁器坏304・仏飯器305、皿309、瀬戸美濃系磁器碗306、京信楽系灯明受皿307、土師質皿308・壺310がある。19世紀前～幕末である。

304は染付、305は色絵、306は染付の端反である。307は内面に灰釉をかけ、仕切りに1箇所切り込みを入れる。外面無釉で重ね焼き痕がある。308は底部外面に回転糸切り痕がある。309は染付で、疊付無釉で離れ砂が付着している。310は土師質で、外面はヘラケズリが施され、底部外面は未調整である。

#### ③土壤 SK11 (図15、図版28～30)

出土遺物には、瀬戸美濃系磁器碗311・蓋312、産地不明陶器蓋313・台付灯明受皿314、ミニチュア擂鉢315、加工円盤316、大谷焼徳利316、堺明石系擂鉢318～320、漆器椀321、三味線322・323、竹ヘラ324がある。19世紀前～幕末である。

311・312は染付で、312は端反で焼継痕がある。313は内外面に黄土色釉をかけ、外面に飛鉢装飾、口縁部内面設置面に白泥を塗る。314は受皿内面および台に灰釉をかけ、底部外面は無釉で回転糸切り痕がある。315は内面に透明釉をかけ、緑釉の丸文を3箇所配す。底部外面に回転糸切り痕がある。316は瓦素材である。317は外面に鉄釉をかけ、肩部にヘラ彫りで「木 助 十冬 伊」の文字を入れる。318～320は外縁帯の張り出しが強く、口縁部内面に1条沈線が廻るが、319は口縁部内面の擂目を揃えるナデにより消失している。318・319は見込みに放射状、320は三角形状の文様が施される。321は内外面に黒漆、322・323は三味線の一部で、323には「三」の墨書がある。

#### ④土壤 SK12 (図15、図版31)

出土遺物には、土人形325、ミニチュア羽釜326、堺明石系擂鉢327、産地不明陶器鉢328がある。325は型合わせの大黒天である。326は土師質の羽釜で、底部に回転糸切り痕がある。327は外縁帯の張り出しが強く、擂目はナデにより揃えられ、見込みは三角形状の文様が施される。328は内外面に鉄釉をかけ、高台無釉の片口鉢で、見込みに4箇所の目跡がある。

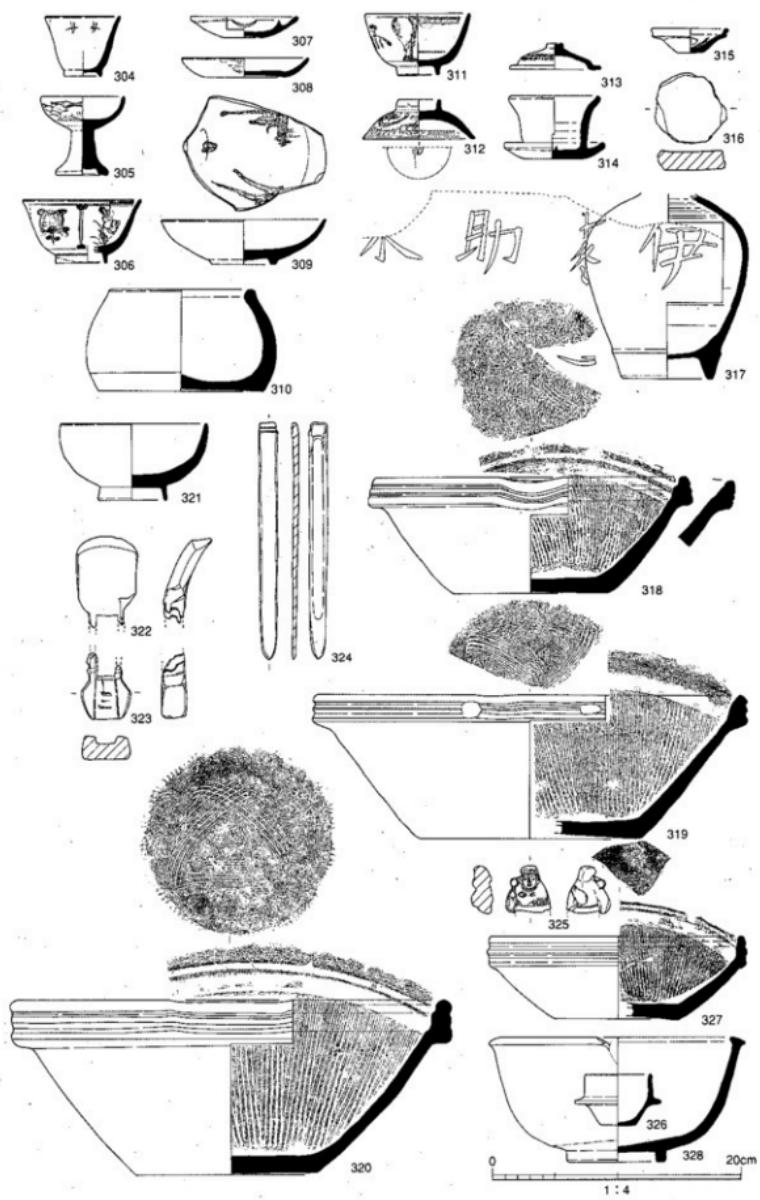


図15 土壌 SK10 (304~310)、SK11 (311~324)、SK12 (325~328) 出土遺物

#### 4) 土壙 SK13・14 (図4)

SK13は森田家（旧：福屋家）屋敷の西側において検出し、瓦を主体に廃棄した土壙で、長辺4m、検出短辺1mで調査地外に広がり深さ1mを測る。また、SK14は三澤家（旧林家）屋敷の東側で検出した鉢を埋置した遺構である。

##### ① 土壙 SK13 (図16、図版5・31・32)

出土遺物には、京信楽系碗329・火入れ331・灯明皿334・徳利338、瀬戸美濃系磁器碗330・蓋333、瀬戸美濃系陶器皿332、備前灯明受皿335、産地不明陶器風炉336・土瓶337、木製品339、漆製品340、木簡341がある。19世紀前～幕末である。

329は灰釉をかけ高台無袖、330・333は染付で、330は端反、332は型打成形の斐皿で、灰釉をかけ疊付無袖である。331は灰釉をかけ、口縁部に白泥を塗り外面に鉄絵を施す。内面および底部外

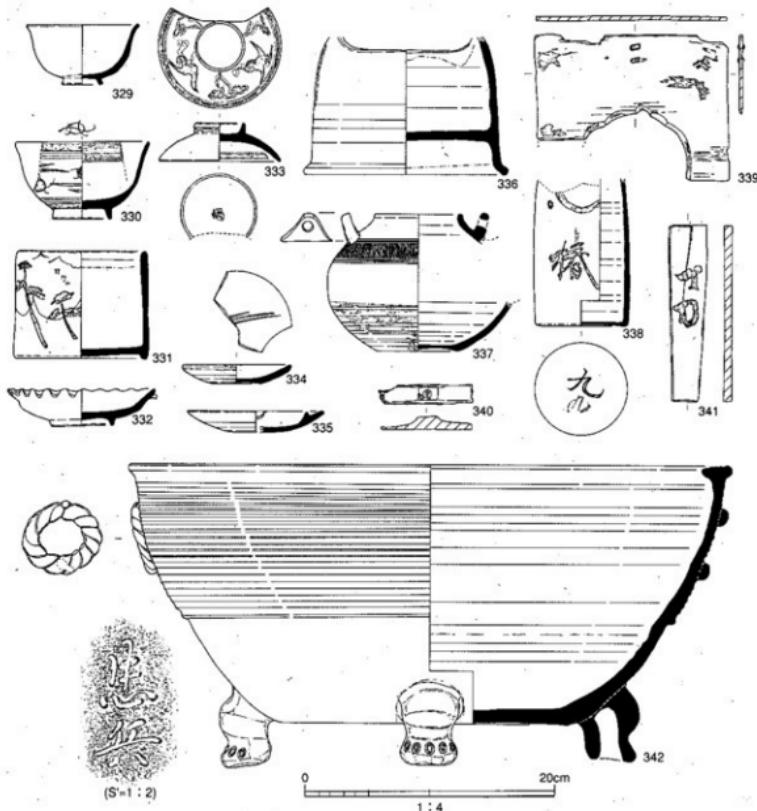


図16 土壙 SK13 (329~341)、SK14 (342) 出土遺物

面無釉である。334は内面に灰釉をかけ見込みに3条沈線、口縁部に灯芯油痕がある。335は仕切りに切り込みが入る。

336は外面に灰釉をかけ鉄釉を流しかけ、切り込みの火窓があり、内面および高台内無釉である。

337は褐色の硬質胎土で体部外面上半に施釉し、底部外面には煤の付着が顕著である。338は外面に灰釉をかけ、底部外面無釉で「九九」の墨書がある。

339は外面に黒漆、雲形の装飾があり止め金具が付いている。340は黒漆を外面に塗る。341は墨書があるが訛読不明である。

## ② SK14 (図16、図版32)

出土遺物には、埋置された丹波鉢342がある。342は体部中位で輪積みを施し、内外面に鉄釉をかけ、底部外面は無釉、口縁部上面から体部上半にカキ目を施す。体部上位に輪状の粘土紐を貼り付け釣手を表現し、底部4方向に中空の獸足を貼り付ける。底部外面に「忠兵」の陰刻がある。

## 5) 土壙15~17 (図4)

いずれも森田家（旧：福屋家）屋敷西側で検出し、SK15は長辺3.8m、短辺1.4mの長方形を呈し、深さ25cmを測り瓦を主体に廃棄した土壙である。また、SK16は長辺3.2m、短辺2.8mの不整形円形を呈し、深さ15cm、SK17は長辺2.5mの不整形形を呈し、深さ12cmを測る土壙である。SK16と17は、ほぼ同位置で廃棄行為が繰り返し行われておりSK17→16への新旧関係が考えられる。

### ① 土壙 SK15 (図17、図版5・33・34)

出土遺物には、肥前系磁器壺343・碗344・皿345~347・349・鉢348、肥前系陶器皿350、瀬戸美系陶器皿351・土瓶353・植木鉢356、土師質皿352、產地不明陶器火鉢354・壺357、加工円盤355、瓦質製品358・359がある。18世紀末~19世紀前葉である。

343~345は染付で、344は口銘で高台内に「大明□□」銘である。346は白磁である。

347・349・350の見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、347・349は高台に離れ砂が付着し、349は見込みに離砂と重ね焼きの痕跡がある。

348は染付で、壺付無釉、高台内は方形二重枠内「福」字である。

351は黄白色の硬質胎土に黄色釉をかけ、底部外面無釉で見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。352は底部外面に回転糸切り痕がある。

353は灰釉をかけ、外面に綠釉と白色釉をかけ流す。底部外面無釉で円錐状の三足を貼り付ける。

354は瓦質で、外面に獸頭を貼り付け両側面から貫通させている。355は瓦素材である。

356は内面上位~外面に灰釉をかけ、内面には綠釉をかけ流す。高台無釉で壺付に4箇所切り込みを入れる。357は外面に長石釉をかけ散らしている。

358・359は瓦質二連式壺の付属品である。中空で背面に壺正面両脇下端のほぞ穴に挿入接合の小起をもつ。

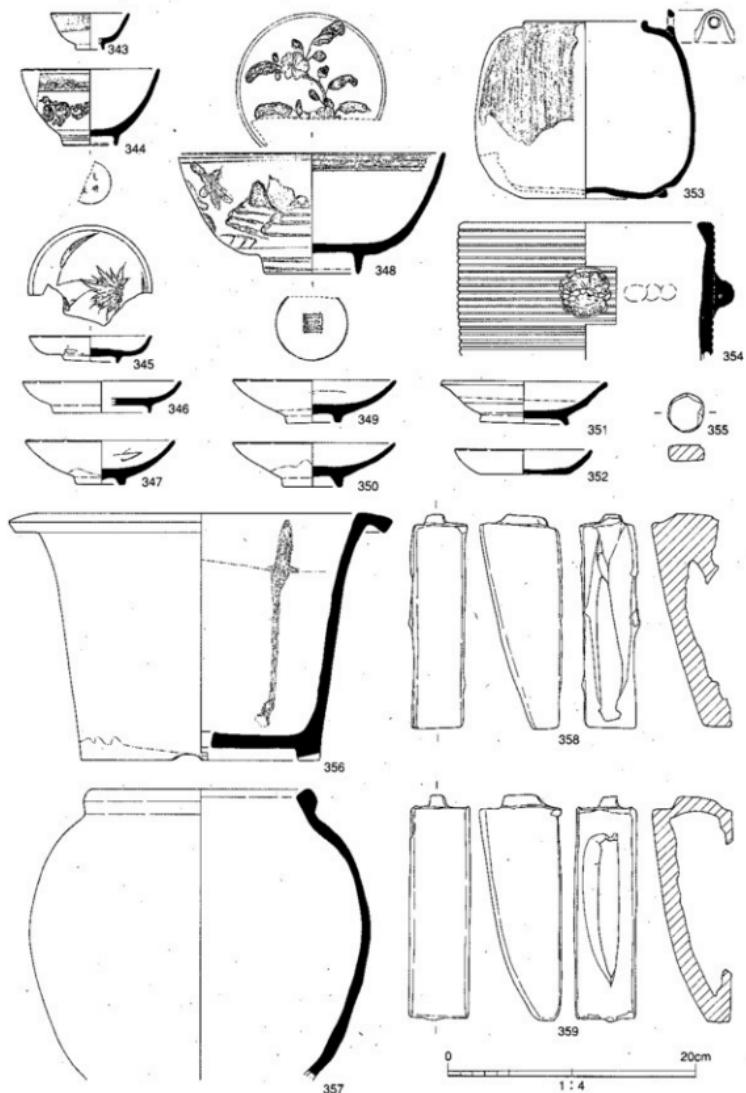


図17 土壌SK15出土遺物

### ②土壤 SK16 (図18、図版34・35)

出土遺物には、肥前系磁器碗360・皿362・363・365・366、壺368、中国産磁器皿367、瀬戸美濃系磁器碗361、皿369、京信楽系碗370・灯明受皿375・水注380、土師質皿371・蓋377、產地不明陶器蓋372・373・376・灯明受皿374・土瓶379、加工円盤378、堺明石系擂鉢381がある。19世紀前～幕末である。

360・361は染付の端反である。362は口銘で見込みに龍を描く。

363・365は染付で、高台は無釉で離れ砂が付着、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで離れ砂が付着し重ね焼きの痕跡がある。364は外面に灰釉をかけ高台無釉、内面は銅綠釉をかけ見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、高台内はケズリによる円錐状の突起がみられる。

366は型打成形の青磁で、高台内にハリ目跡がある。367は染付で、高台内に放射状のケズリ痕があり、疊付に離れ砂が付着している。368は疊付に離れ砂が付着している。

369は型押成形で、疊付無釉で内面には陽刻の文様を施す。370は鉄絵の注連縄文である。

371の底部外面は回転糸切り痕である。372は黄土色釉をかけ、高台内を除いて内外面に白泥を塗る。口縁部に灯芯油痕があり灯明皿に転用している。373は灰釉をかけ口縁端部は無釉、外面にカキ目を廻す。

374は内面に鉄釉をかけ、外面にも薄く鉄釉を塗る。仕切りにU字状の切り込みを入れ、外面には重ね焼きの痕跡がある。375は灰釉をかけ、外面無釉である。

376は土瓶の蓋で、亀形の摘みを付け、外面に灰色釉に白泥をかけ、口縁部内面に白泥を塗る。底部外面に同心円状のケズリ痕がある。377は水注の蓋で、内面に柿釉を施し外面無釉、底部外面に回転糸切り痕がある。378は瓦素材である。

379は外面に灰色釉をかけ白泥と鉄釉で文様を施し、蓋受部～内面は無釉である。

380は白化粧土に緑釉・鉄釉・黄色釉で鳥花を描き、底部に三足を貼り付ける。内部は中空の上下二重構造であり、把手が下部への注取水口を兼ねる。口縁部には蓋合わせのための切り込みが2箇所ある。口縁部上端は無釉、底部外面に煤の付着痕がある。SK33出土の水注141と同じタイプである。381は外縁帯の張り出しは強く、擂目の上端はナデにより揃えられている。

### ③土壤 SK17 (図18・19、図版35～37)

出土遺物には、肥前系陶器碗382～384、肥前系磁器壺385・386・皿387～391・394・395、備前擂鉢392・393がある。18世紀前～中葉である。

382～384は灰釉をかけ、384は高台無釉である。385・386は疊付無釉、387・388は染付で、高台無釉、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼きの痕跡、高台には離れ砂が付着している。389・390・394は染付で、389は見込みに手描き五弁花文、390は内面に蟹、394は龍を描き、いずれも高台内にはハリ目跡がある。391・395は青磁で、内面に陰刻文様、高台内を蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼きの痕跡がある。392・393は口縁部内面に低い突帯が廻り、擂目上端は揃えられない。392は見込みにクロスパターン文様、393は底部まで擂り下ろし、見込みに不定形の文様を施す。



図18 土壌SK16(360~381)、SK17(382~391)出土遺物

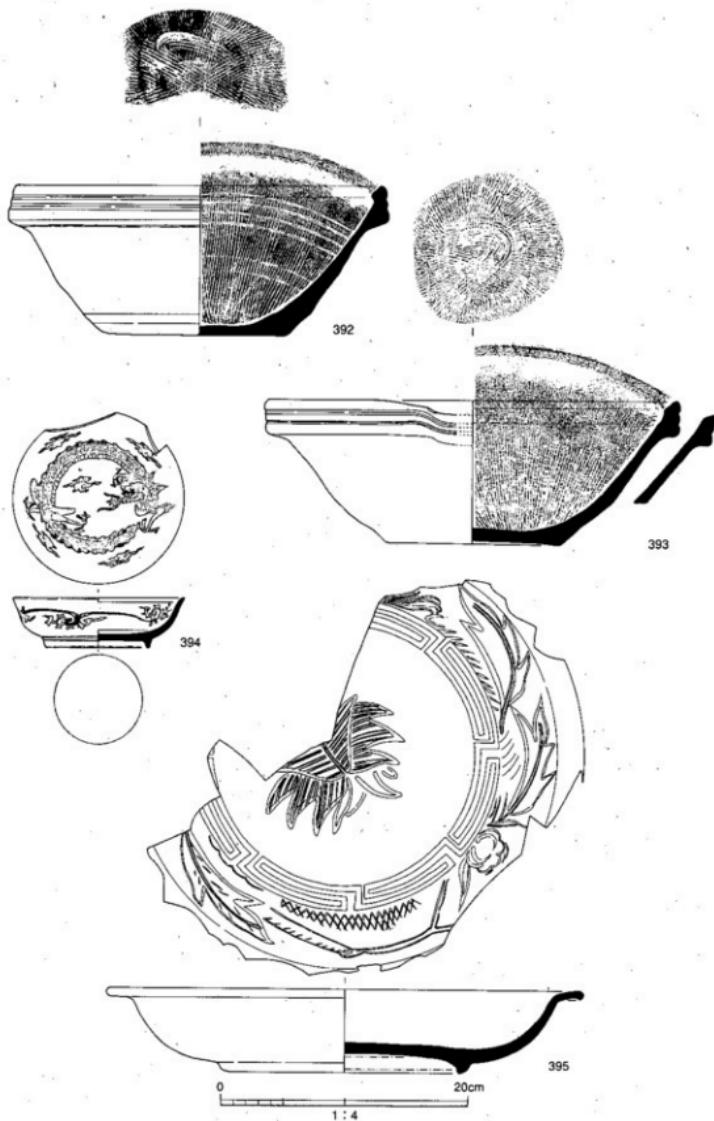


図19 土壙 SK17出土遺物

## 6) 土壙 SK18・19 (図4)

福屋家屋敷西側において検出した土壙であるが、SK18A～DはSK08と同様、検出時において重複関係が把握されず、遺構掘削過程において細分された土壙である。当初より遺構細分による厳密な遺物の取り上げができなかったため、ここに示す一括性については問題を残している。また、SK19は、福屋家屋敷の裏側側面で検出した土壙である。

### ①土壙 SK18-A～D (図20～22、図版38～42)

SK18-A 出土遺物には、肥前系磁器碗396～398、瀬戸美濃系陶器鉢399・皿400、產地不明陶器土瓶401・火入れ402、41-Bには肥前系磁器碗403・404、京信楽系碗405・406、瀬戸美濃系磁器碗407、土師質皿408・409、41-Cには肥前系磁器碗424～427、坏428・429、蓋430・431、土師質蓋432・皿439・442、目皿443、京信楽系碗433・花生435・鋤446、瀬戸美濃系陶器碗434・植木鉢436・鉢447・448、肥前灯明皿437・440・441・灯明受皿438、加工円盤444・445、產地不明陶器壺449、漆製品450、41-Dには肥前系磁器紅皿451・坏452～454・猪口456、瀬戸美濃系磁器碗455、產地不明土瓶457、焜炉458、下駄459・460がある。また、SK41の細分以前の一括として京信楽系碗410、肥前系磁器碗411・仏飯器412・蓋414・415、肥前系陶器鉢422、中国製磁器皿413、產地不明陶器蓋416・417、瀬戸美濃系陶器鉢418・421、煙管雁首419、土人形420、焜炉423がある。19世紀前～幕末である。

#### SK18-A

396は染付で、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内に手描きの五弁花文である。397は外面上白泥による刷毛目文、内面は白泥を打ちかける。398は青磁染付で、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内に手描きの五弁花文、高台内二重方形枠内渦福である。

399は口縁部から内面に灰釉をかける片口鉢、400は馬目皿である。401は外面に鉄釉をかけ体部上位にカキ目と灰釉をかけ流す。口縁部上端面と底部無釉で三足を貼り付け、底部外面に墨書がある。

#### SK18-B

403は青磁染付で、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内に松竹梅、高台内は二重方形枠内渦福である。404は染付の端反で、口縁部内面に屈輪文、焼き緋ぎの痕跡がある。

405は灰釉をかけ高台無釉の小杉碗、406は注連縄と海老を描く。海老は赤、注連縄は鉄絵と色絵であるが一部消色している。407は染付の端反である。408・409は底部外面に回転糸切り痕がある。

#### SK18-C

424～426は染付、427は青磁染付で口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圈線内にコンニャク印判による五弁花文、高台内方形枠内渦福である。428は染付、429は白磁、430・431は青磁染付で、いずれも口縁部内面は四方櫛文、見込みは二重圈線内に手描きの五弁花文、430は高台内に二重方形枠内渦福、431は二重方形枠内に文字である。432は火消壺の蓋で、内面中央に煤が付着している。

433は灰釉をかけ高台無釉である。434は体部外面に飛鉈装飾を施した鎧茶碗で、口縁部外面から内面に灰釉をかける。435は外面に白泥をかけ色絵を施す。底部外面は無釉で、豊付を弧状の切り込みを入れる。436は口縁部内面から外面に灰釉をかける。

437・440・441は口縁部に灯芯油痕、439は底部外面は回転糸切り痕、442は底部外面に同心円状のケズリ痕と簀の子状の圧痕がある。443は焼炉の通気用の付属品、444・445は瓦素材である。

446は内外面に鉄釉をかけ底部外面は無釉で三足、口縁部に把手を貼り付け、見込みに目跡がある。447は口縁部を押圧で輪花状に成形し、体部外面は縱位筋状の押圧を施す。外面は灰釉、内面は鉄釉をかける。448は内外面に鉄釉をかけ、底部外面無釉、見込みに3箇所の目跡と重ね焼きの痕跡がある。449は内外面に褐色の鉄釉をかけ、外面には黒色釉を流しかける。外面に把手を貼り付け、底部外面無釉で墨書きがある。450は手鏡箱で、内外面に黒漆を塗る。

#### SK18-D

451は外面に貝の放射脈を表現している。452~454は染付、455は染付の端反である。455は染付で口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圓線内に手描きの五弁花文、蛇ノ目凹形高台である。457は内外面に鉄釉を塗り、口縁部端面は無釉である。

458は瓦質で、外側は粘土板成形で方形に仕上げ、円筒形の内部施設および上位3方向に四角錐形の受け、四足と出窓の空気窓を貼り付ける。両側に松毬状の把手を貼り付け、外面には陰刻の菊花を型押している。外面はミガキ、内面には粗いハケが施される。上面四隅に貫通する小孔を穿ち、「長左衛門」の刻印がある。

459・460は角型の削り下駄である。

#### SK18細分以前一括

410は色絵の注連繩文と宝珠文を描く。411は豊付無釉で、離れ砂が付着している。412は底部外面無釉、413は染付、414は青磁染付で、口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圓線内に手描きの五弁花文、高台内方形枠内渦福である。415は染付で、外面に橋摘みを貼り付け、口縁部は無釉である。

416・417は外面に鉄釉をかけ、417は花形の摘みを貼り付ける。418は口縁部から内面に灰釉をかける。419は銅製の煙管、420は前後型合わせの男人立像で、底部からの小穴がある。

421は口縁部を押圧して輪花状に成形し灰釉をかけ、内面に色絵を施し、高台無釉、豊付に墨書き、見込みに目跡がある。422は三島手で、内面から口縁部外面に灰釉、見込みに離れ砂が付着、体部下位に鉄釉を塗り、高台無釉である。423は口縁部から下方に切り込み火窓をつくり、内面には角状の受けを貼り付けている。

#### ②土壤 SK19 (図23、図版43)

出土遺物には櫛461、下駄462・463がある。462は丸型の連歯下駄、463は角型の削り下駄である。

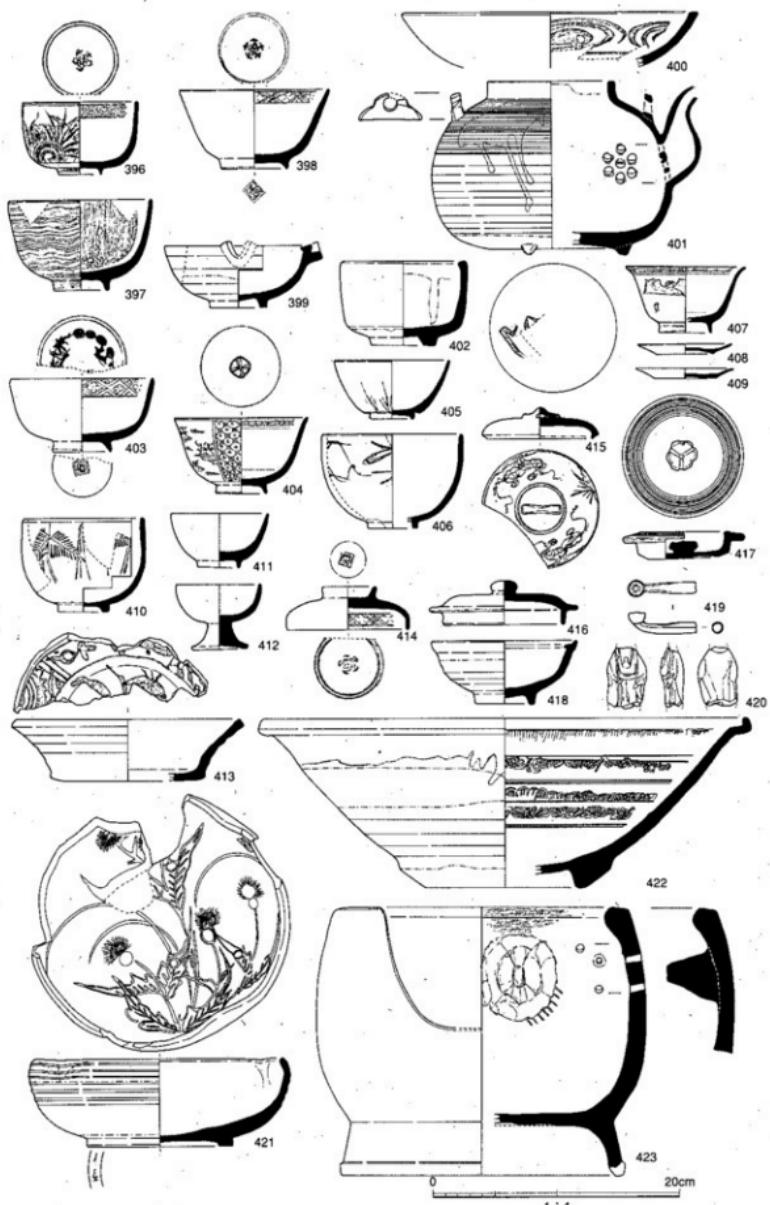


図20 土壌SK18-A (396~402)、SK18-B (403~409)、SK18細分以前 (410~423) 出土遺物

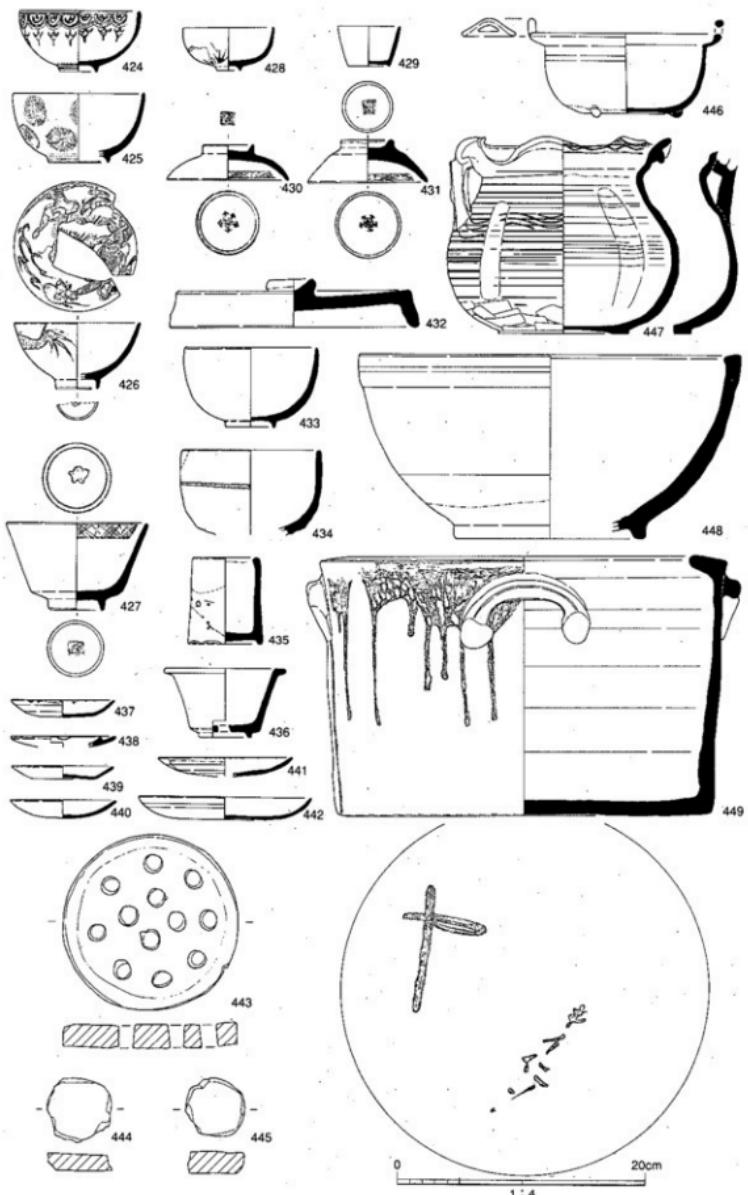


图21 土壤 SK18-C 出土遗物

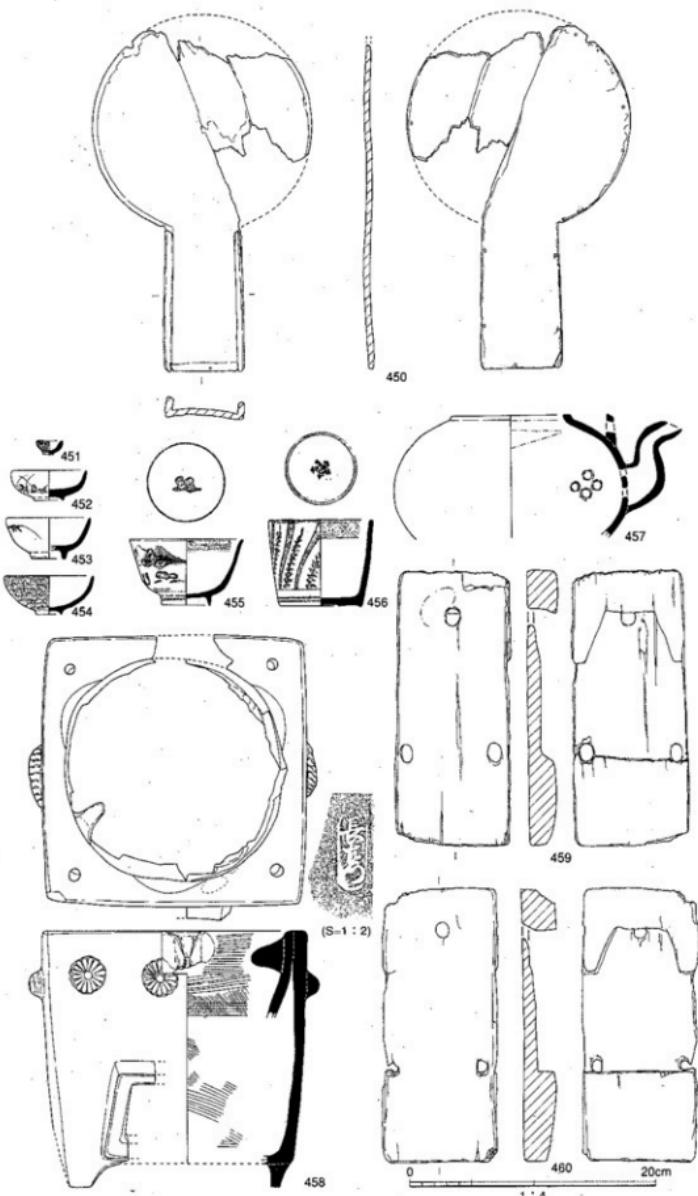


図22 土壙SK18-C(450)、SK18-D(451~460)出土遺物

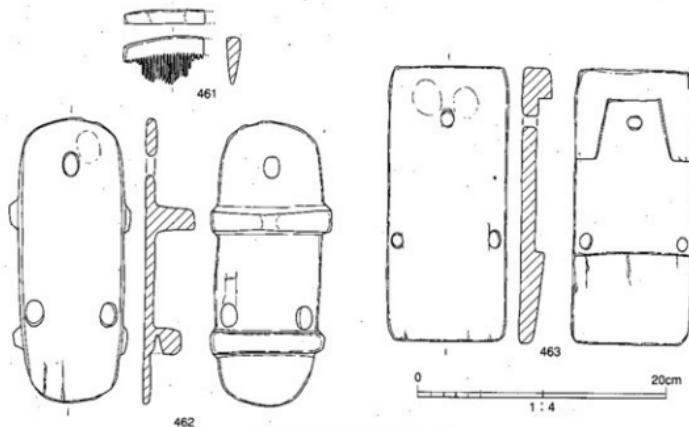


図23 土壙 SK19出土遺物

#### 7) 溝 SD01~03 (図4)

福屋家～森田家（旧：福屋家）の屋敷界で検出した南北方向の溝である。SD01は断面形がU状を呈し、幅40cm、深さ30cmを測る瓦廐棄の溝であり、森田家（旧：福屋家）西側にある土壙群SK15～17を切り込んでいる。SD03は断面形が浅い皿状を呈し、幅80cm～1.2m、深さ10cmを測る。SD03とほぼ同位置に長さ2.7mの石組SX01が施される。石積は結晶片岩の割石を使用したもので、西側で面合わせをしている。溝SD03と同時存在ではないが、屋敷界を指標する構造物と考えられる。SD02は断面形が深い皿状を呈し幅40～50cm、深さ10～20cmを測る。SD01～03はいずれも収束する溝である。

SD01と03は屋敷裏側での屋敷を界するための溝であるのに対し、SD02は屋敷表で屋敷を界する溝として機能していたと考えられる。いずれの溝も屋敷を界する溝として理解するならば、屋敷界が同位置で踏襲されずに動いていると考えられる。

##### ① SD01 (図24、図版44・45)

出土遺物には、肥前系磁器碗464・466～468・471～474・坏469・470・段重475・蓋476・皿479・480、瀬戸美濃系磁器碗465・477、瀬戸美濃系陶器蓋物478・皿481・482、土師質蓋483、產地不明陶器蓋484・485・皿488、土瓶490、備前蓋486・灯明受皿488・壺491、大谷灯明具489・徳利494・甕495、加工円盤492、煙管吸口493、木製品496がある。19世紀前～幕末である。

464は染付で、口縁部内面に雷文、465は色絵の端反である。466～468は染付で、467は口縁部内面に雷文、見込みは一重圈線内に松竹梅文、468は口縁部内面に四方桙文、見込みは二重圈線内に手描き五弁花文である。

469・470は染付で、469は疊付に離れ砂が付着している。471は色絵、472～474は染付である。475は色絵で、口縁部端面および腰部外面は無釉である。

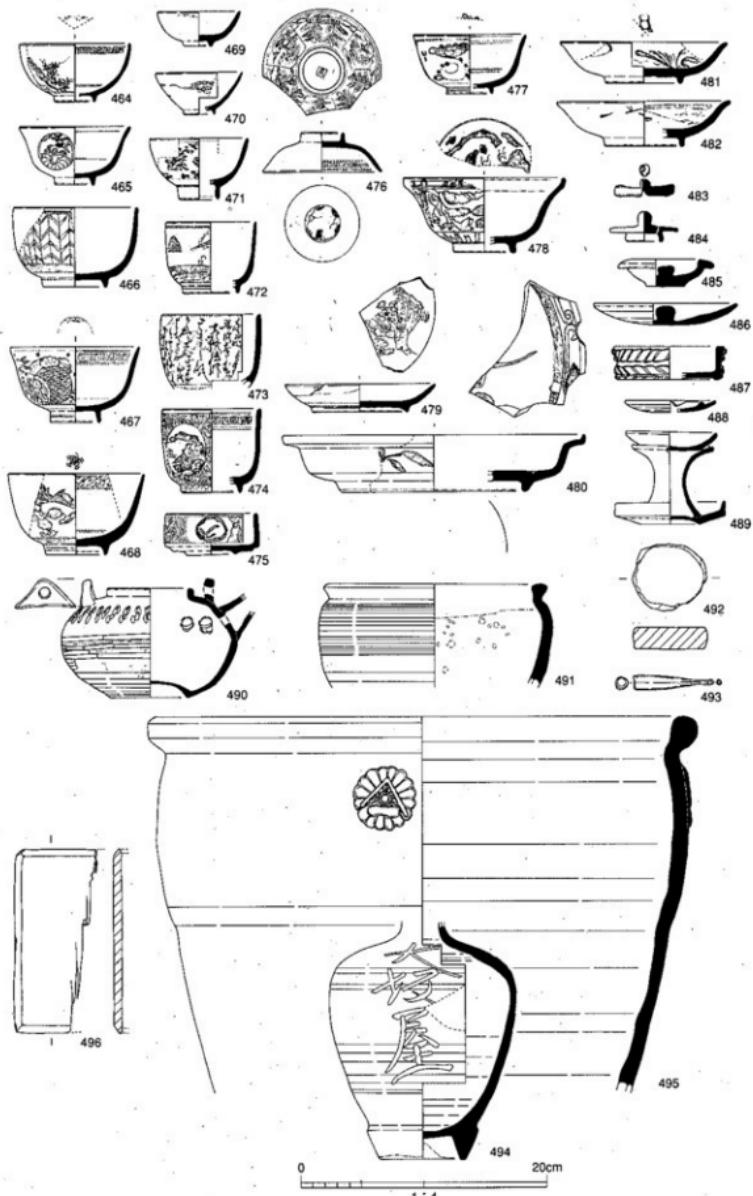


图24 满 SD01出土遗物

476は染付で、口縁部内面に雷文、見込みは一重圈線内松竹梅文である。477は染付の端反である。478は外面および見込みに鉄絵を施し、口縁部内面無釉、疊付に離れ砂が付着している。479は染付、480は色絵であるが消色している。481・482は染付で、482は高台内に円刻のケズリ痕がある。483は鉄製の摘みを差し込んでいる。484は内外面に柿釉を施し、摘みの横に上下に貫通する小孔を穿つ。485は内面に柿釉を施し、底部外面は回転糸切り痕である。486は内面に褐色の鉄釉を塗る。487は体部外面に粘土紐を貼り付け、繩を表現している。灰釉をかけ底部無釉である。488は仕切りに切り込みを入れる。489は茶褐色の鉄釉をかけ、底部外面無釉である。492は瓦素材である。490は体部上半に柿釉をかけ、底部外面には煤が付着している。491は口縁部内面から外面に褐色の鉄釉をかけ、外面にカキ目がある。494は外面に「大坂屋」のヘラ書き、495は外面に鉄釉を塗り陽刻文を貼り付けている。496は蓋板で、内外面に黒漆を塗り、外周に金彩を施す。

## ② SD02 (図25、図版46)

出土遺物には、土師質皿514・515、備前擂鉢516がある。514・515は中世的な形態・手法を呈する皿である。516は内面に波状の横目を入れる。

## 8) 溝 SD04~07 (図4)

福屋家～三澤家（旧：林家）の屋敷界で検出した南北方向の溝である。SD04は断面形が浅い皿状を呈し、幅60～70cm、深さ10cmを測る。南側では溝形態であるが、北側では形態が崩れ溝状の落ち込み状となり収束する。SD05は断面形がU字状を呈し、幅60cm～1.2m、深さ20～40cmを測る収束する溝で、溝底部は北側で深度を増す。SD05の延長状に位置するが、収束し連続しない。SD06はSD05に隣接して並行する溝で断面形がU字状を呈し、幅60cm～1m、深さ40cmを測る収束する溝である。SD07は幅1.5m、深さ50cmを測る収束する溝で連続性がなくSD10と重複する。

これらの溝はいずれも収束する形態で溝としての連続性に欠け、屋敷地を界する明瞭な溝として機能していたのか否かは明確ではない。

## ① SD04 (図25、図版46)

出土遺物には肥前系磁器碗497・皿502、瀬戸美濃系陶器皿498～501がある。497は染付、502は外面に陽刻文を施し口銹である。498～501は灰釉をかけ、見込みは円形状に釉剥ぎを施す。498～501は折縁皿で、499～501はソギ入りで、499・500は見込みに重ね焼きの痕跡がある。

## ② SD05 (図25、図版46)

出土遺物には、土師質皿505・506、瀬戸美濃系陶器鉢508、肥前系磁器碗507・509がある。505・506は底部外面回転糸切り痕があり、506は口縁部に灯芯油痕がある。507は染付で、疊付無釉、508は型打成形で内面に色絵を施し、509は口縁部から内面に灰釉をかけ底部無釉である。

③ SD06 (図25、図版46)

出土遺物には、焼塙壺蓋510、土師質皿511・512、肥前系磁器碗513がある。511・512は底部外面は回転糸切り痕、513は染付の天目碗で墨付に離れ砂が付着している。

④ SD07 (図25、図版46・60)

出土遺物には、漆器蓋517、椀518・519、下駄520がある。517・518は外面黒漆に赤色の紋、内面赤漆、519は内外面黒漆で外面に鶴を描く。520は角型の露卯下駄である。納穴数は前1、後1である。

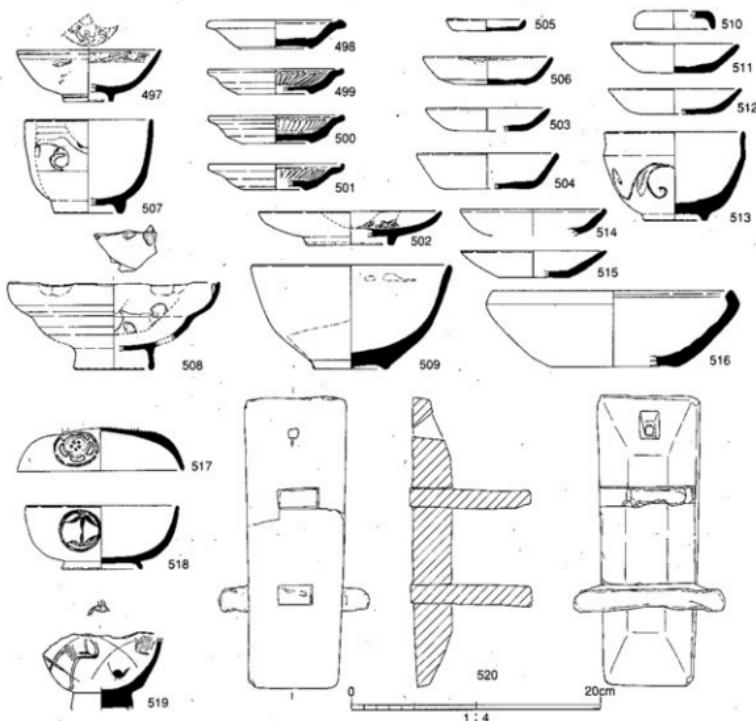


図25 溝 SD04 (497~504)、SD05 (505~509)、SD06 (510~513)、SD02 (514~516)、SD07 (517~520) 出土遺物

9) 溝 SD08 (図4・26、図版1・47・48)

福屋家～三澤家（旧：林家）の屋敷界で検出した南北方向の溝である。幅2.8～3m、深さ30～50cmを測り、溝底部は南から北へ緩やかに傾斜しながら立ち上がる。収束する可能性も考えられるが、北側では擾乱により溝の連続性は確認されていない。福屋家～三澤家（旧：林家）の屋敷界に最初に設けられた溝である。

出土遺物には肥前系磁器碗521・522・皿523、瀬戸美濃系陶器碗524・皿525・550、肥前系陶器皿526～533、京信楽系香炉534、土師質皿535～549、壺551・鍋553・554、備前鉢552、産地不明陶器壺555、陶製人形556がある。17世紀中～後葉である。

521は染付の筒形碗で豊付無釉で、離れ砂が付着している。522は灰釉をかけ、豊付無釉で離れ砂が付着している。523は白磁で、豊付無釉で離れ砂が付着している。524は内外面に鉄釉をかけた天目碗で、高台無釉である。525は灰釉をかけ、見込みは鉄釉を塗る。高台内に重ね焼きの痕跡がある。

526は灰釉丸皿で見込みに胎土目跡、高台無釉である。527は体部が直線的に伸び口縁部にいたる形態で、灰釉をかけ見込みに胎土目跡、内面に鉄釉で文様を施し高台無釉である。

528～533は溝縁皿で、528は灰釉をかけ見込みに砂目跡、高台内に離れ砂が付着し高台無釉であ

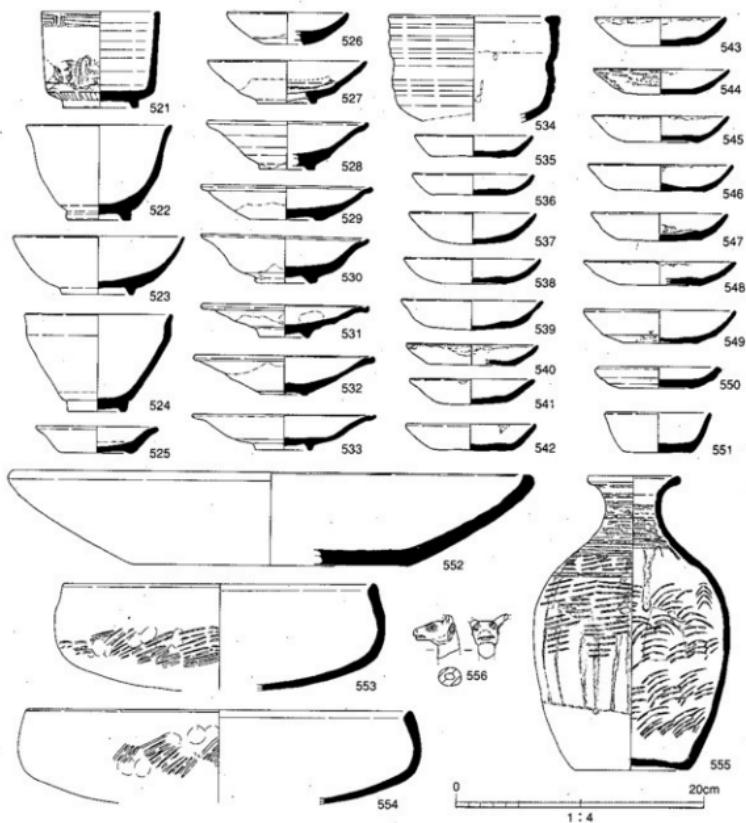


図26 満 SD08出土遺物

る。529は灰釉をかけ、見込みに砂目跡と重ね焼きの痕跡、高台無釉である。530・532は藁灰釉をかけ、見込みに砂目跡、高台無釉、532は高台内に円錐状の突出したケズリ痕がある。531・533は灰釉をかけ、見込みに砂目跡、高台無釉で、531は高台内に円錐状の突出したケズリ痕がある。

534は黄白色の硬質胎土に灰釉をかけ、内面と高台無釉、体部外面に凹線が廻る。

535～549は底部外面に回転糸切り痕と養の子状圧痕があるものがある。540～549は口縁部に灯芯油痕がある。551は底部外面に回転糸切り痕がある。550は灰釉をかけ口縁部の接合部で剥がれてい る。537は内面に透明釉をかけ、長石釉を打ちかけている。553・554は底部から内傾しながら立ち上がる口縁部で、外面にタタキが施される。556は鉄釉をかけ、中空で口に小孔を穿っている牛である。555は内外面に鉄釉を流しかけし、底部無釉、体部外面に平行タタキ、内面には同心円の当て具の圧痕がある。

#### 10) 溝 SD09 (図4・27~30、図版2・49~60)

福屋家～森田家(旧:福屋家)の屋敷界で検出した南北方向の溝である。幅2.6～3.2m、深さ1mを測る。福屋家～森田家(旧:福屋家)の界に最初に設けられた溝である。断面観察から、前述した石組SX01は、SD11が埋没する早い段階で屋敷界を標する構造物として森田家屋敷(旧:福屋家)側に設置されたと考えられる。その時期はSD11の底部に層厚25cmほどの堆積後、人為的に溝が埋められ始める以降の段階である。ただし、この段階ではまだSD11は埋没過程であり、完全に埋没していない。SD11と同位置で検出したSD12は、SD11が埋没する過程で溝状凹地として残り、石組SX01と共に屋敷界を機能していた可能性がある。SD12の収束形態は掘削に伴うものでなく、SD11の埋没過程で形成された凹地が結果的に収束形態として検出されているのかもしれない。

出土遺物には、肥前系磁器碗557～567・581～583・588・589、仏飯器584・坏585～587・590～596、皿597～604・608、肥前系陶器坏568・碗569～579・壺605・火入れ606・607・皿609～637・鉢671・696・697・699、京信楽系碗580、土師質皿638～668、瀬戸美濃系陶器向付672・鬚水入れ674、產地不明陶器壺669・台付灯明受皿673・用途不明品677、京信楽系灰落し670・鍋678・土瓶679、焼塩壺675・676、備前搗鉢680～689、火鉢690、鍋691・692、焰焰693・698、硯694、煙管695、土人形700、ミニチュア鉢701・人形702、加工円盤703、漆器蓋704・椀705～707、曲物708、木簡709がある。17世紀中～後葉、18世紀前～中葉の二時期に大別される。

557～566は染付で、557は口縁部内面に四方櫛文、559は見込みに手描きの五弁花文、560は内外面に花唐草文である。567は青磁で高台無釉である。

568は底部外面は回転糸切り痕、569は藁灰釉をかけ底部無釉、570・571は灰釉をかけ底部無釉、572は内面に灰釉、外面には銅綠釉をかけ分け、高台無釉、高台内に円錐状のケズリ痕の小突起がある。573・575は灰釉をかけ底部無釉、574は灰釉をかけ疊付無釉、576は藁灰釉をかけ底部無釉の天目碗である。577は陶胎染付で、疊付無釉、578は白色の硬質胎土に灰釉をかけ外面には上絵を施し、高台無釉、高台内中央に円刻のケズリ痕、その横に「雲」刻銘がある。579は内外面に白化粧土を刷毛塗りし、疊付け無釉である。

580は注連縄文碗で、色絵でウラジロを描いているが消色している。

581・582は口縁部内外面および外面高台際と見込みに一重圓線を廻す。583は染付の筒形碗で、壘付に離れ砂が付着している。584は染付で、壘付無釉である。585・586・588・589は染付で、585は雨降文、587は白磁である。590～592は高台内に円錐状のケズリ痕の小突起がある。593・594・596～604は染付である。

605は口縁部から外面に鉄釉をかけ底部無釉、底部外面にはケズリ、壘付に離れ砂が付着している。606は玉縁状口縁で、直立する体部に鉄釉で刷毛目装飾を施す。607は高台三方を抉り三足とし、内面に長石釉を散らしかけし見込みに円形の釉剥ぎを施す。608は染付で、底部に三足を貼り付ける。

609～618は鉄絵で、609・613・614・616・618は見込みに胎土目跡、617は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。619～622・633・634は丸皿で、619・621・633は見込みに胎土目跡、634は砂目跡、621・622は薺灰釉をかける。623～626・628・630・632・637は溝縁皿で砂目跡がある。629・631は見込みに胎土目跡、635・636は内面に銅緑釉をかけ見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、635は見込み、636は体部外面に重ね焼きの痕跡、高台際に放射状のケズリ痕がある。

638～655は底部外面に回転糸切り痕と簀の子状圧痕があり、666～668は形態・手法が異質である。669は内外面に鉄釉をかけ、底部外面無釉で回転糸切り痕がある。670は灰釉をかけ、鉄釉と白泥で上絵を施し、底部外面無釉である。672は纖部で、鉄釉と綠釉で上絵を施す。673は受皿内面に褐色の鉄釉を塗り、台および底部外面は無釉、円盤状高台を呈し、高台外面に回転糸切り痕、高台際に重ね焼きの痕跡がある。674は灰釉をかけ鉄釉で上絵を施し、底部外面無釉である。675・676は粘土板輪積み成形である。671は白化粧土で、内外面に刷毛塗りし文様を施す。底部無釉である。

677は体部を隆帯で4分割し、花形のヘラ彫りと透かしを施す。底部に接合痕があり脚部を有すると考えられる。678は鉄釉をかけ、口縁部2方向に把手を貼り付け、底部無釉で三足を貼り付ける。679は灰釉をかけ、体部外面に鉄釉で上絵を施し、底部外面無釉である。

680～689は口縁部内面に突帶を廻し、描目は粗く680・681は直線に下ろされていない。いずれも口縁部内面のナデ後に描目が施され上端は揃えられていない。686・687の見込みはクロスバターンであり、680～684・687・688の口縁部外縁直下に重ね焼きの痕跡がある。

690は瓦質で、三足を貼り付け、体部外面に花文のスタンプを施す。691・692は土師質で体部外面にタタキ、煤の付着が著しい。693は底部から直立する口縁部である。696は内面に白化粧土で刷毛目を施し綠釉をかけ流し、見込みに6箇所の目跡がある。

697は三島手であるが白象嵌されず、内面に灰釉をかけ、見込みに輪状の離れ砂が付着、体部外面下位に鉄釉を塗り、高台無釉である。699は内外面に鉄釉をかけ、白化粧土の刷毛目を内外面に施し、底部無釉である。

708は型作りの体部に折縁状の口縁を貼り付け、双耳に上下に貫通する孔を穿つ。702は犬で、上半に鉄釉をかける。703は瓦素材である。

704は内外面に赤漆、705・706は内外面に黒漆、707は外面黒漆、内面赤漆を塗る。708は方形の小窓がみられる。

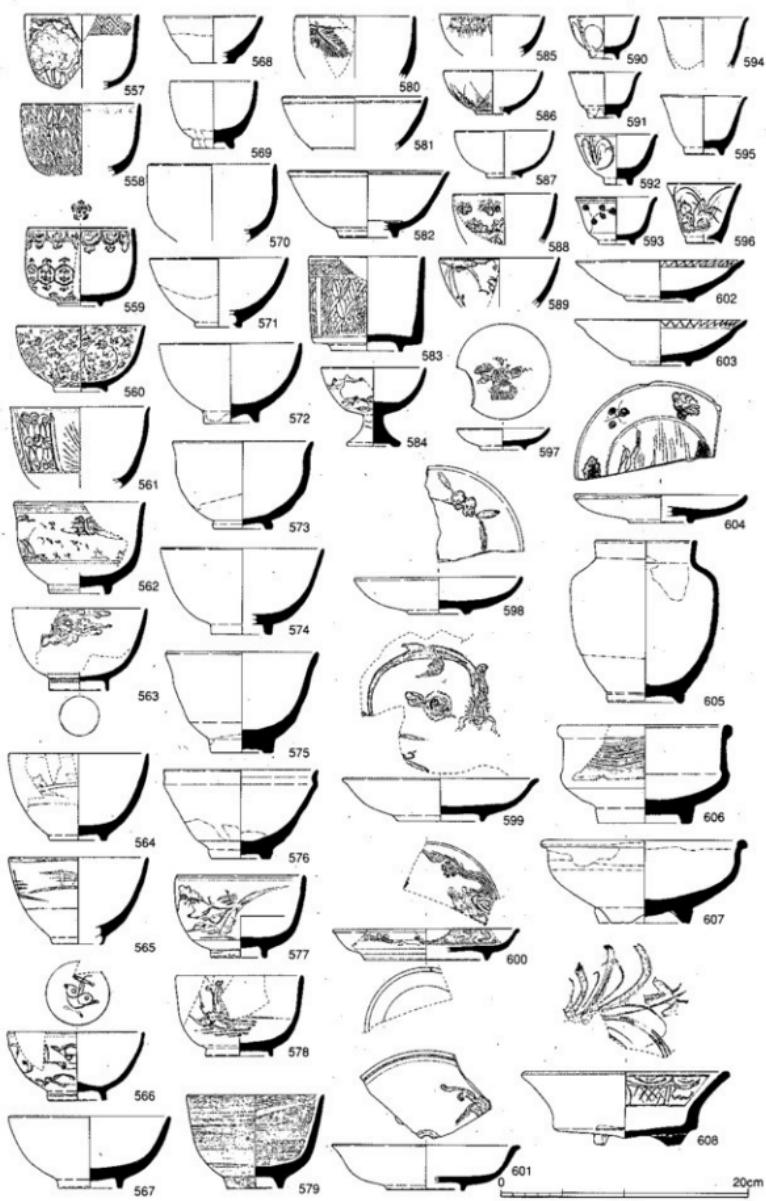


図27 溝 SD09出土遺物

1:4

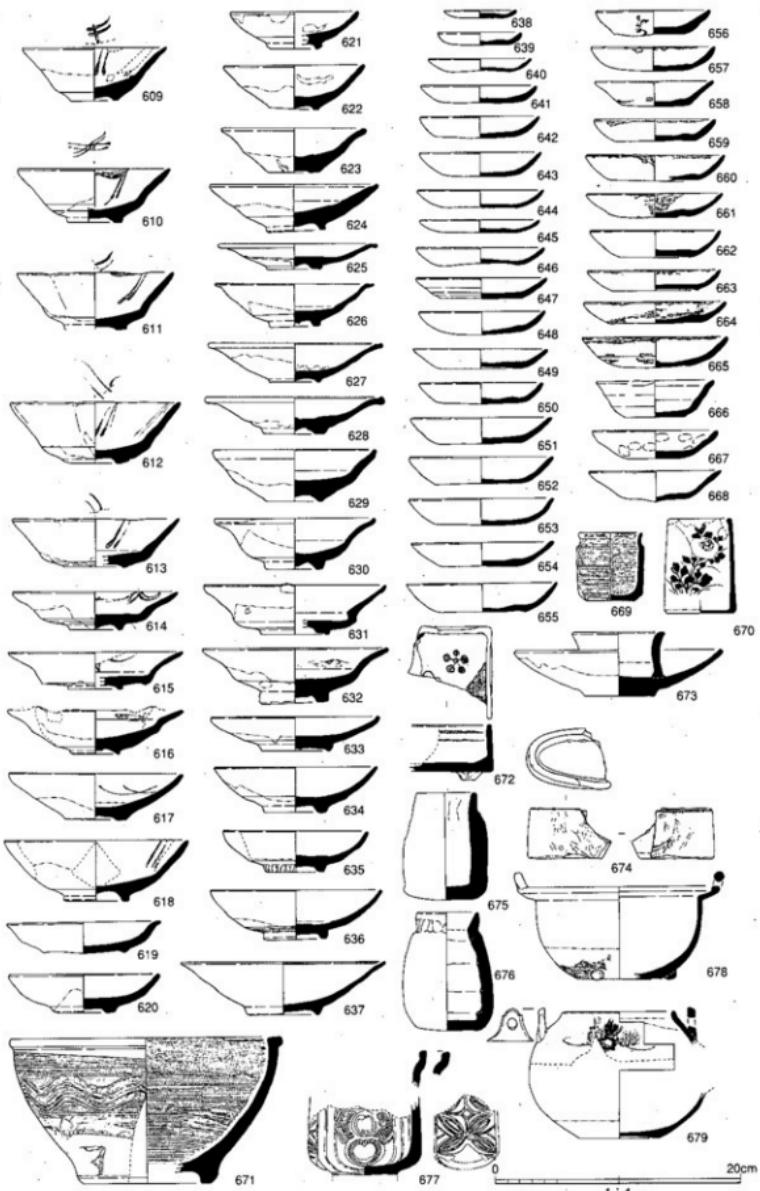


図28 満SD09出土遺物

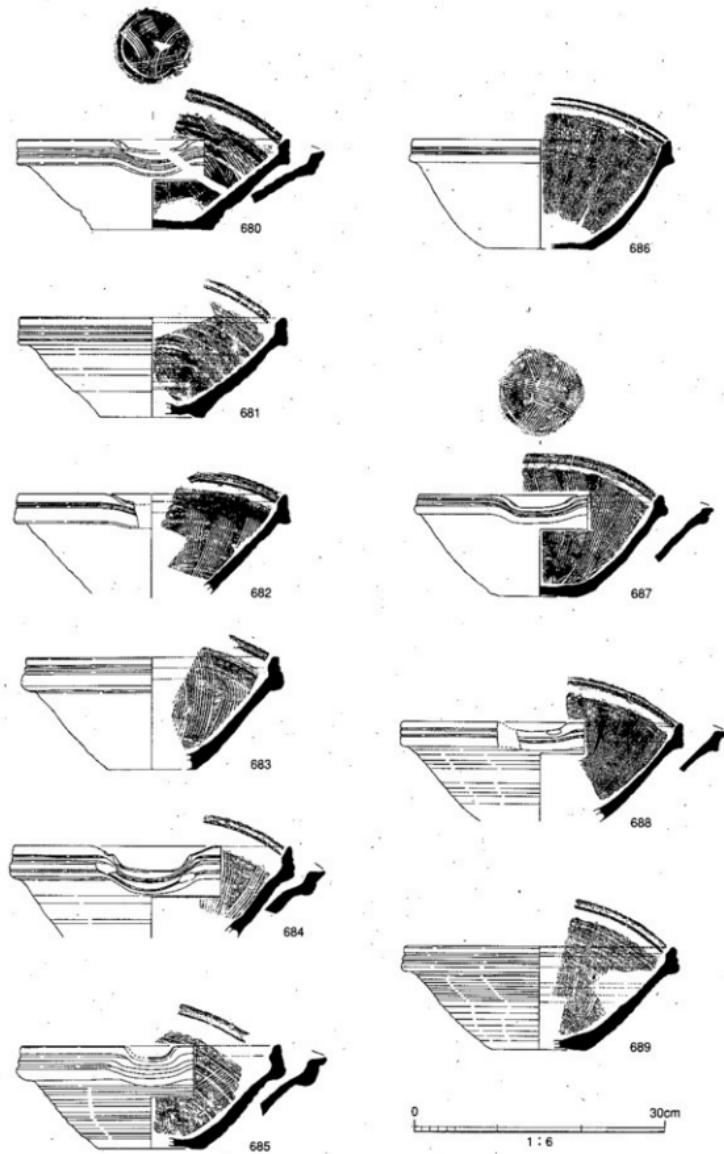


図29 溝SD09出土遺物

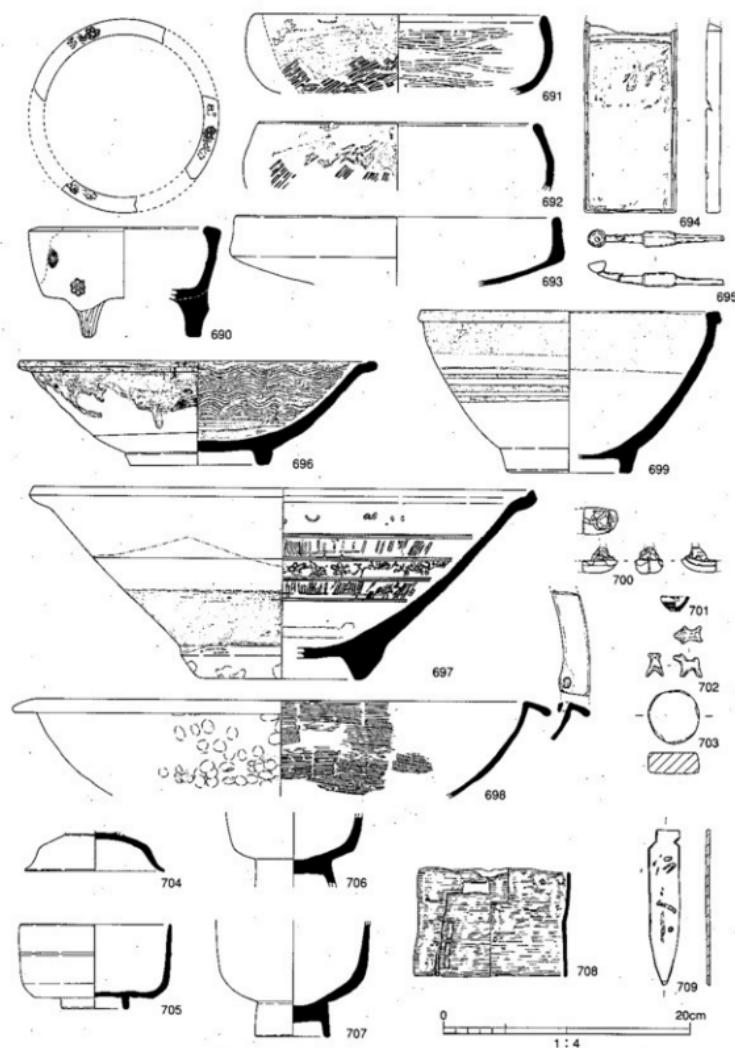


図30 溝 SD09出土遺物

### 11) 井戸 SE01～SE15 (図4・31、図版6～9)

屋敷界周辺において井戸掘形が重複し隣接して設置されている場合が多い。井戸側施設の確認はほとんどが中下位からであり、SE07は2段の桶積み上げ(長径70×短径60cm、井戸側残存1.3m)、SE06では3段の桶積み上げ(長径60×短50cm、井戸側残存1.8m)を確認している。桶積み上げは下段の桶に被さり積み上げられる。大部分の井戸側は桶積み上げの单一構造と考えられるが、SE01は上位が瓦積で下位が桶積み上げ2段の井戸側(長径70×短径60cm、井戸側残存2.6m)、SE14は桶積み上げであるが、桶(径60cm)の外周に結晶片岩の石組が施されていることから、上位が石組である可能性がある。また、桶積み上げについては木材が残存せず竹製籠のみがみられるものがある(SE02・06・14)。上位での木材の腐蝕は想定できるが、下位での腐蝕は考え難く、籠だけが遺存するものについては、再利用のため桶材が抜き取られている可能性がある。

SE05は桶積み上げの井戸側の木材を内側へ折り曲げ、また、井戸側が板材で覆われる。これは単に、井戸側内に木材を投棄するのではなく、井戸の上位を掘削した上で桶材を折り曲げ、あるいは抜き取った桶材で井戸側を封鎖している。また、SE08では桶積み上げの井戸側(径60cm)中央に竹を突き刺した状態がみられる。井戸廃棄時の処置と考えられるが、竹の箇は取り除かれておらず、通気筒としての意識はなく模擬的な行為にとどまっていると考えられる。いずれの井戸も18世紀中葉～19世紀代である。

#### ①井戸 SE01 (図32、図版62)

出土遺物には、井戸掘形より肥前系磁器碗710・蓋713・段重715、肥前系陶器碗712、備前灯明皿716、加工円盤717・718、井戸側より肥前系磁器碗711、京信楽系統714、丹波窯719がある。

710・711は染付、712は内外面に白化粧土で刷毛目を施す。713は染付の合子の蓋で、714は灰釉をかけ底部無釉、715は染付で、口縁部および腰部無釉である。716は口縁部に灯芯油痕がある。717・718は瓦素材である。719は体部外面に鉄釉をかけカキ目を施し、輪状の粘土紐を貼り付ける。

#### ②井戸 SE02～05 (図32、図版62・63)

SE02掘形より肥前系磁器碗721・皿724、肥前系陶器碗722、京信楽系統725、井戸側より瀬戸美濃系磁器碗723、漆器椀720、SE03出土遺物には、井戸側より漆器椀726、曲物727・728、木製灯明台729、SE04掘形より肥前系磁器碗730・734・紅皿732・坏733・皿735・736、肥前系陶器碗731・739、土師質皿737・738、加工円盤740・741、SE05掘形より肥前系陶器碗742、肥前系磁器蓋物743、備前窯744がある。

720は黒漆で高台内に「清合□□」がある。721は染付、722は鉄釉をかけ白化粧土で刷毛目を施す。723は染付の端反で、724は染付で、見込みは蛇目釉剥ぎである。725は灰釉をかけ上絵を施し、底部無釉である。726は内面に赤漆、外面は黒漆に紋を施す。727は側面に釘穴がある。

730は染付で高台内に崩れた「大明年製」銘、731は呉器手で疊付無釉、732は外面に貝の放射脈を表現する。

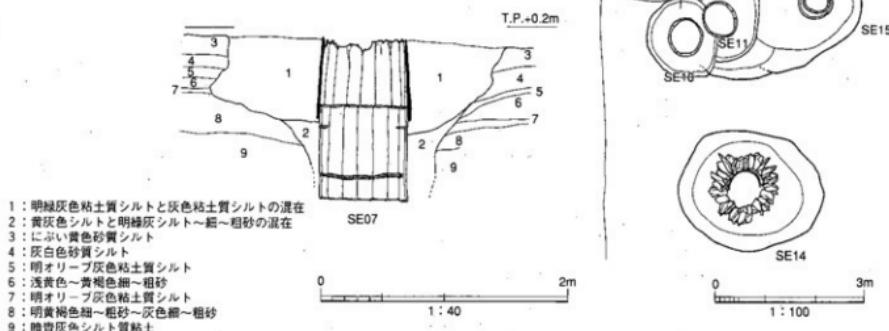
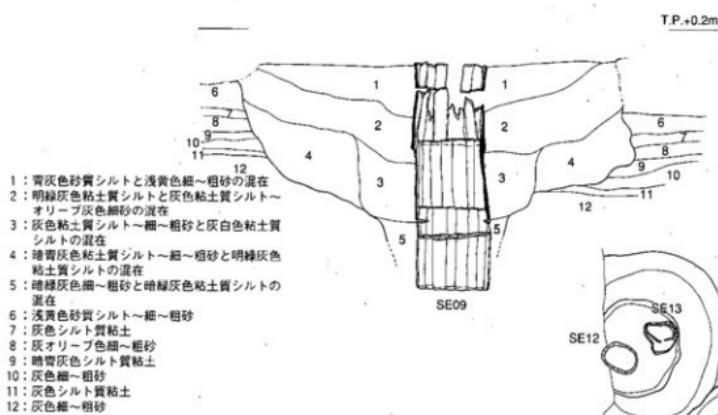
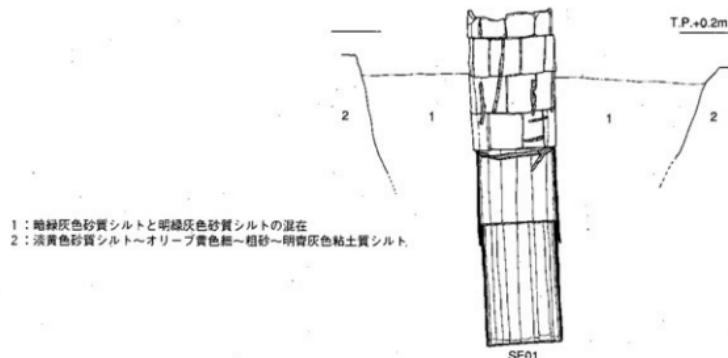


図31 井戸 SE01・07・09側面十見透し断面図・SE10～15平面図

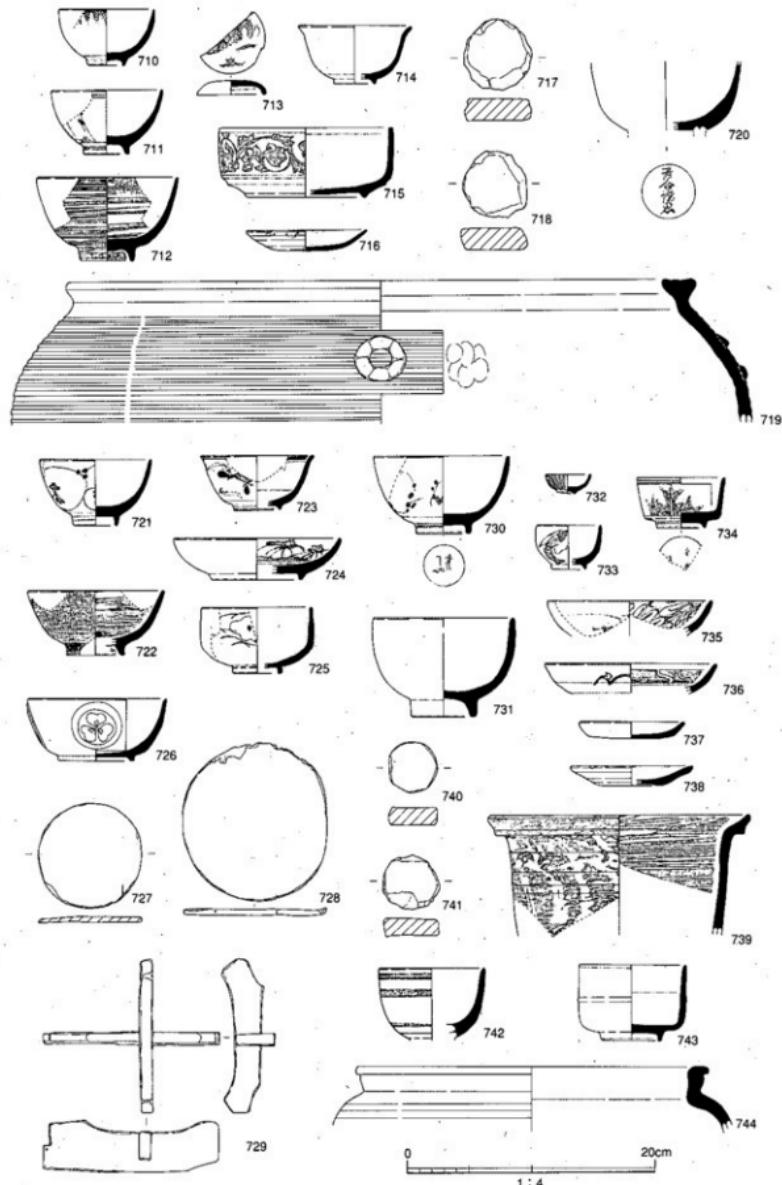


図32 井戸 SE01(710~719)、SE02(720~725)、SE03(726~729)、SE04(730~741)、SE05(742~744)出土遺物



図33 井戸SE06(745~762)、SE07(763~774)出土遺物

733～736は染付、737の底部外面は回転糸切り痕と竜の子状圧痕がある。738は底部外面ヘラ切り痕で口縁部に灯芯油痕、形態・手法が異質である。739は鉄釉をかけ、外面には白泥で文様を施している。740・741は瓦素材である。

742は陶胎染付、743は白磁で、体部に小突帯が廻り、口縁部無釉で壘付に離れ砂が付着している。

#### ③井戸 SE06・07 (図33、図版64・65)

SE06掘形より肥前系磁器碗745～747・750・皿751～755、壺748、瀬戸美濃系陶器椀749、肥前系陶器皿756～758、土師質皿759・760、焼塩壺761、土人形762、SE07掘形より肥前系磁器碗764・壺766・767、井戸側より肥前系磁器碗763・765・皿768、肥前系陶器鉢769、曲物770・771、木製把手772、箸773・774がある。

745～747は染付、748は染付で高台内無釉、750は染付の筒型碗である。749は口縁部から内面に灰釉、体部外面下半に鉄釉を長石釉を散らし、壘付無釉である。751～755は染付、756・757は灰釉をかけ底部無釉、757は見込みに離れ砂が付着している。758は内面に綠釉をかけ、見込みは蛇目目剥ぎが施される。759・760の底部外面は回転糸切り痕、760の口縁部には灯芯油痕がある。762は女人立像で、前後型合わせて底部から穴が穿たれている。

764は色絵の口銘である。766は染付、767は白磁である。763・768は染付、765は白磁である。

769は三島手で、口縁部をくの字状に屈曲し、内面には白泥による象嵌を施し灰釉をかける。見込みに6箇所の砂目跡がある。体部外面下半に鉄釉を塗り、壘付と高台内は無釉である。

771は側面に釘穴がみられる。

#### ④井戸 SE08 (図34、図版65・66)

出土遺物には、掘形より肥前系磁器碗775・皿777、京信楽系碗776、備前灯明受皿778・土師質皿779・780、備前擂鉢782、井戸側より石製品781・動物遺存体(亀・写真783)がある。

775は染付、776は鉄絵の注連縄文である。777は染付の碁笥底で、高台無釉である。779・780は底部外面回転糸切り痕である。782は口縁部内面に突帯が廻り、擂目は粗い。781はスタンプである。

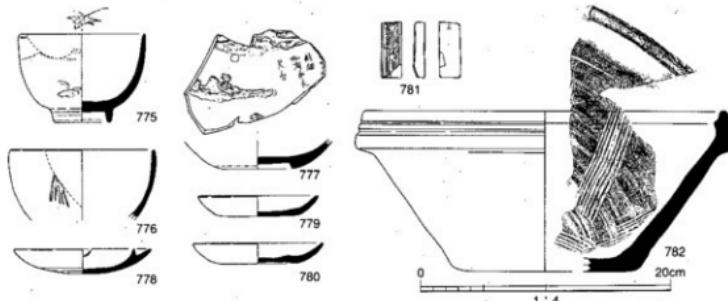


図34 井戸 SE08出土遺物

### 第3節 調査成果のまとめ

調査地は徳島藩士森田家（旧福屋家）・福屋家・三澤家（旧林家）の三つの武家屋敷を横断する。福屋家屋敷では屋敷の表側の建物部に、屋敷の横や裏側に対して下傾斜するような島状の高まりが造られ、屋敷内には地盤の高低差が生ずる。このような屋敷表から屋敷周縁部に対して高低差をつける整地法が、屋敷界の指標とされる屋敷界溝の在り方と何らかの関係を持つことが想定される。

絵図との照合で明確な屋敷界溝とされるものにSD08・09がある。SD08は17世紀後葉には埋没機能を消失する。また、SD09も17世紀後葉には埋没する溝であり、いずれの溝も城下町建設当初に設定された屋敷界の溝である。SD09は部分的に埋没が18世紀中葉まで残るが、18世紀以降、溝内への土砂の堆積により規模は縮小化、もしくは、溝の一部は完全に埋没し屋敷界溝としての意識の低下が考えられる。18世紀中葉以降、屋敷界の指標となる遺構については明確なものはみられず、屋敷界が後世においてもほぼ同位置で踏襲されていたとするならば、19世紀代にみられる土壟SK01・10・12、井戸SE05・08は、屋敷界を無視した位置関係にある。

また、溝SD09と重複するSD03も森田家・福屋家屋敷を界する溝として機能するものと考えられる。ただ、SD03はSD09の埋没過程において、SD09の埋没が均一に進まなかった結果の収束形態を示す溝の可能性があり、屋敷裏では依然として溝形態が残存し、屋敷表での境界部は平坦化していたと考えられる。これは、屋敷の表と裏における土地を界する意識差なのかもしれない。

今回のように、徳島城下町跡において通常みられる屋敷界溝が継承されない理由の一つとして、屋敷内、特に屋敷表での整地による高低差が屋敷界付近で凹地を形成し、見かけ上の溝として機能しているのなら、屋敷界を指標する掘削溝の設定に対する意識を低下させていると考えられる。さらに、17世紀後葉に埋没する屋敷界溝とそれ以降に設定される屋敷界溝の性格差<sup>(1)</sup>、すなわち屋敷界の指標であった溝に対する性格の変容が加味されることによる屋敷界溝の不要性が推測される。今後、屋敷地の建屋部に島状の盛土を施す整地の方法が前川地区で一般的にみられるものなのか、その場合、屋敷界溝がどのような在り方であるのか、その類例を見極める必要がある<sup>(2)</sup>。

元禄5（1692）年の御山下屋敷略図には明瞭に屋敷の界線が記されているが、元禄4（1691）年の御山下画図には、城下町絵図に通常みられる屋敷の界線がほとんど記されていない<sup>(3)</sup>。これが単に絵図における屋敷界線の省略でなく、17世紀後葉における徳島城下町の屋敷界の溝が人為的に埋め戻されるという考古学の事象と関与しているのかもしれない。元禄4年絵図の前川に多くみられる「スレ」が元禄5年絵図にはみられず、「スレ」には新たに藩諸士の名前がみられることからも、城下における武家屋敷地の再編との関係が考えられる。

徳島城下町跡において屋敷界を指標する遺構は、普遍的な形態として存在する訳ではない。その原因は明確ではないが、城下における地域差、また、屋敷（藩士）の格式差から生ずるもの、さらに、屋敷間での土地に関する些細な事情が原因に及んでいるのなら、屋敷界溝をめぐる諸問題は、考古学的範疇を越える問題にまで発展する。

註)

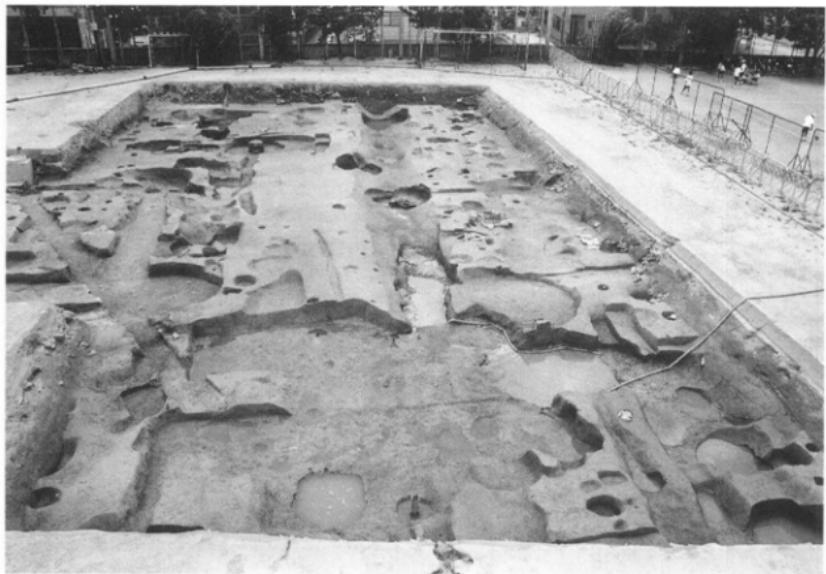
- (1) 今回の調査例も含めて徳島城下町跡での屋敷界溝には、16世紀後葉の城下町建設時に設けられ17世紀後葉に埋没する溝と18世紀以降に新たに設けられる溝があり、規模・構造的な相違より明らかに屋敷界に対する意識の変容がみられる。17世紀後葉における武家屋敷地を取り巻く変容が、屋敷界溝に表れていると考えられる。
- (2) 前川地区においては、2004年に鉄砲之者長屋跡、2005年の徳島藩土林家（旧井間家）における調査があり、今回と同様に屋敷表において鳥状の盛土が確認されている。この整地法が前川地区で通常的に行われていた可能性がある。
- (3) 徳島市立徳島城博物館『徳島城下絵図』2000年。

写 真 図 版



福屋家・三澤家（旧林家）屋敷界（左後方に城山）

（北から）



福屋家・三澤家（旧林家）屋敷界

（北から）



福屋家屋敷

(東から)



森田家（旧福屋家）・福屋家屋敷界

(北から)



土壤 SK01遺物検出状況  
(北から)



土壤 SK07遺物検出状況  
(南から)



土壤 SK07遺構重複状況  
(南東から)



土壤 SK02遺物検出状況  
(西から)



土壤 SK02遺物検出状況  
(西から)



土壤 SK08-A~J  
遺構細分検出状況  
(南東から)



土壤 SK15遺物検出状況  
(北から)



土壤 SK15遺物検出状況  
(東から)



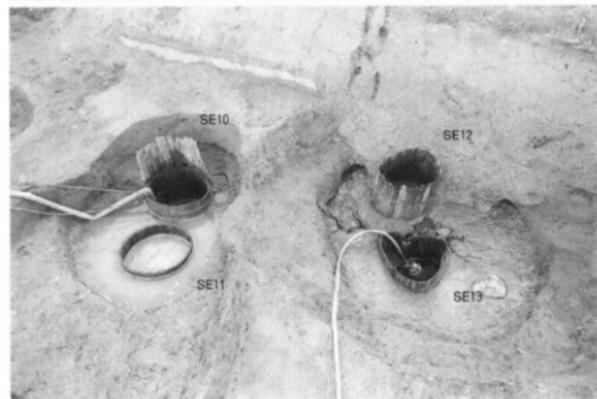
土壤 SK13遺物検出状況  
(北から)



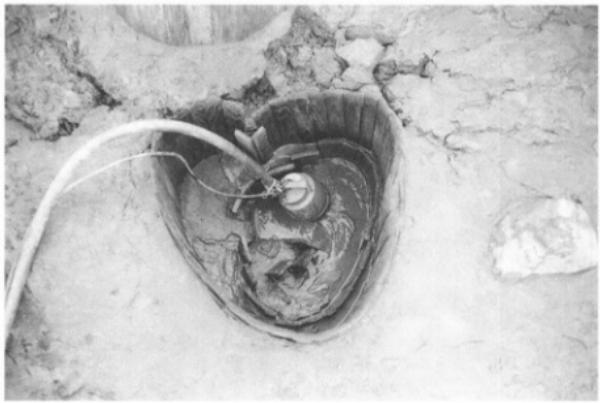
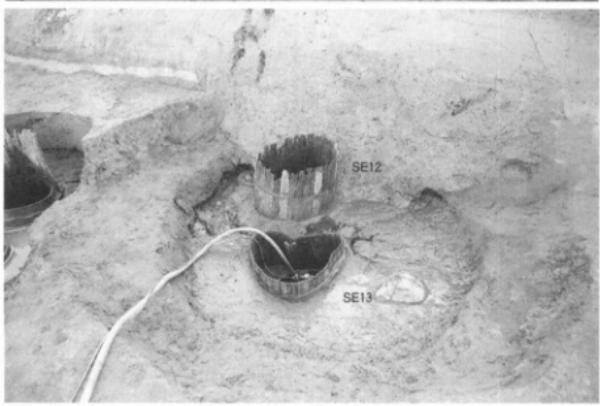
井戸 SE01 (東から)

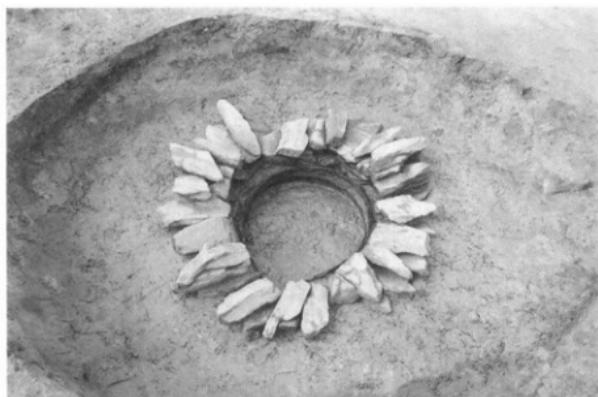


井戸 SE07 (南西から)

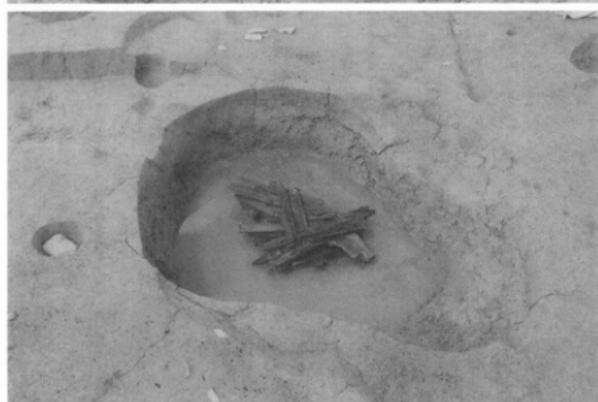


井戸 SE10~13 (北東から)





井戸 SE14 (南から)



井戸 SE05 (南から)



井戸 SE08 (北から)



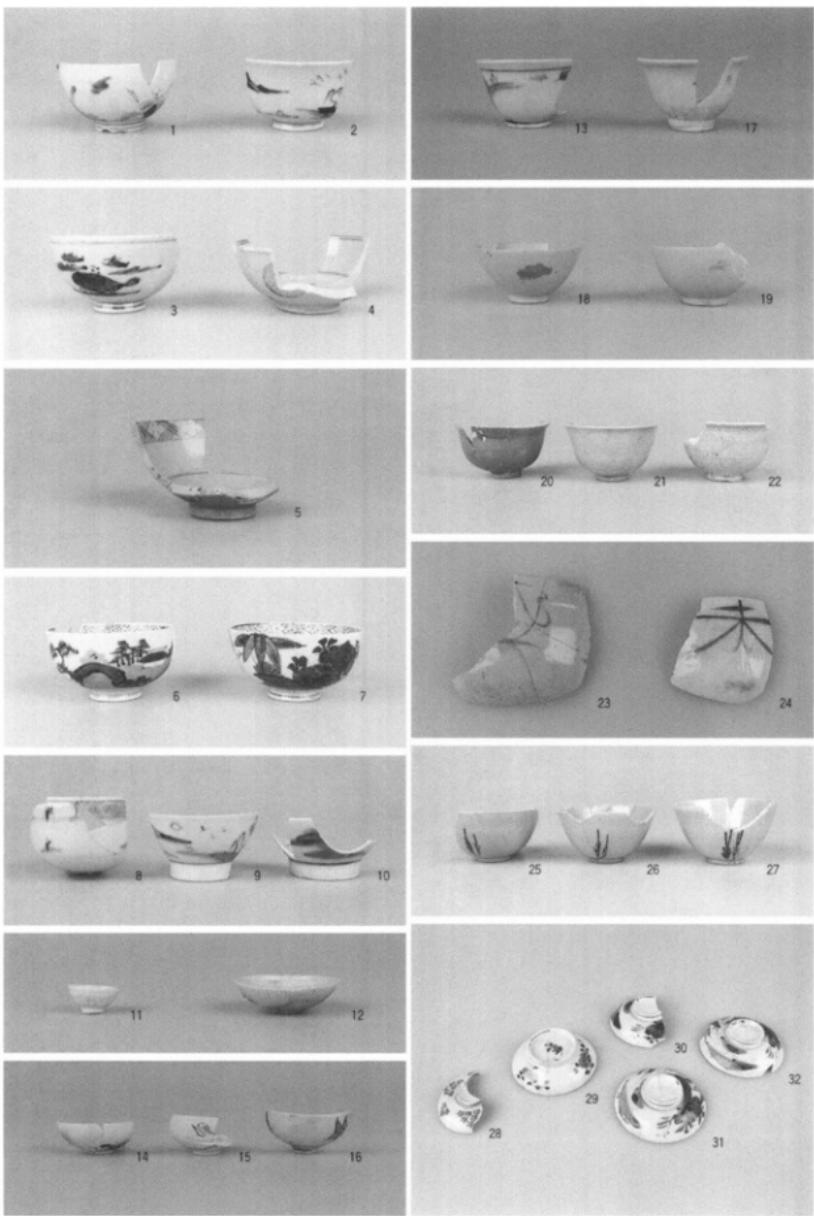
井戸 SE07・09 (西から)



井戸 SE09 (西から)



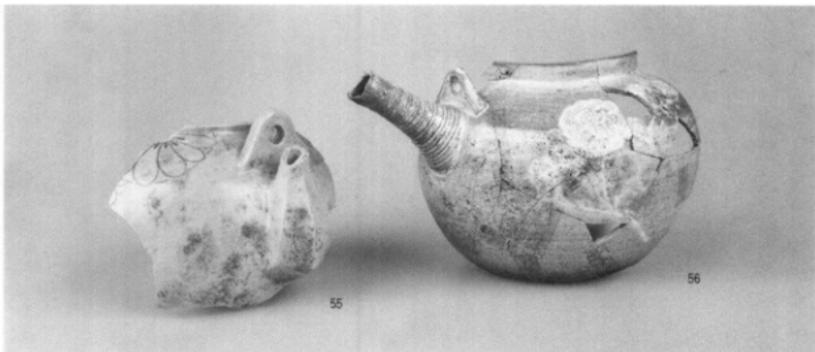
井戸 SE09 (西から)



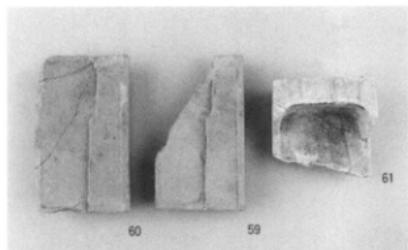
土壤 SK01出土遗物



土壤 SK01出土遺物



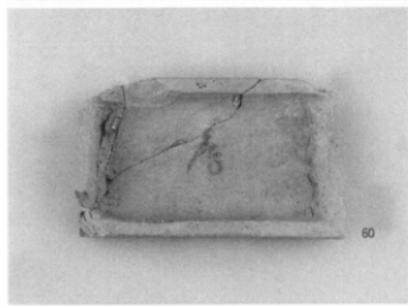
土壤 SK01出土遺物



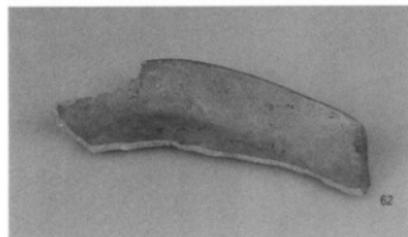
60

59

61



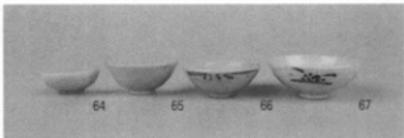
60



62



63



64

55

66

67



68

69



70



71

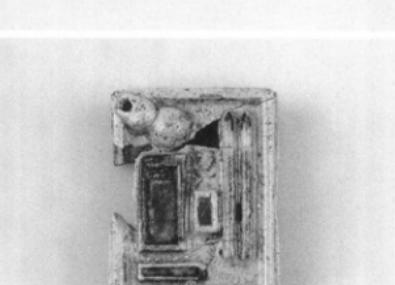
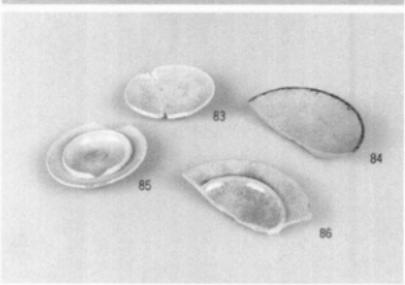
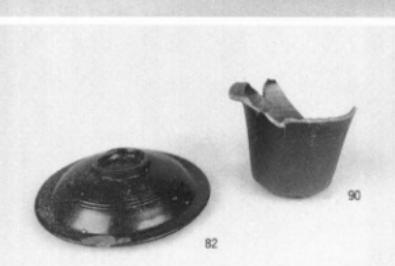
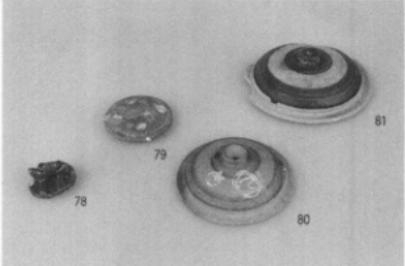
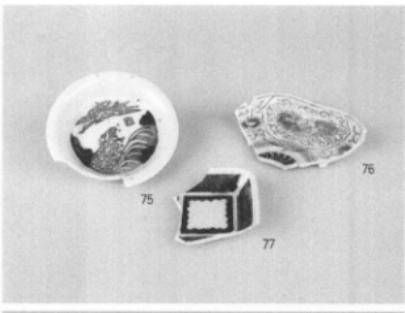
72

73

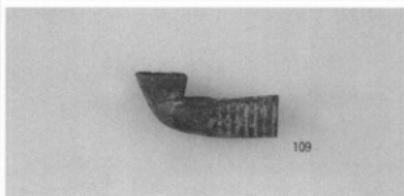
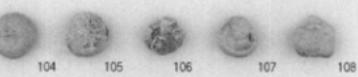
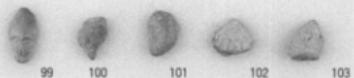


74

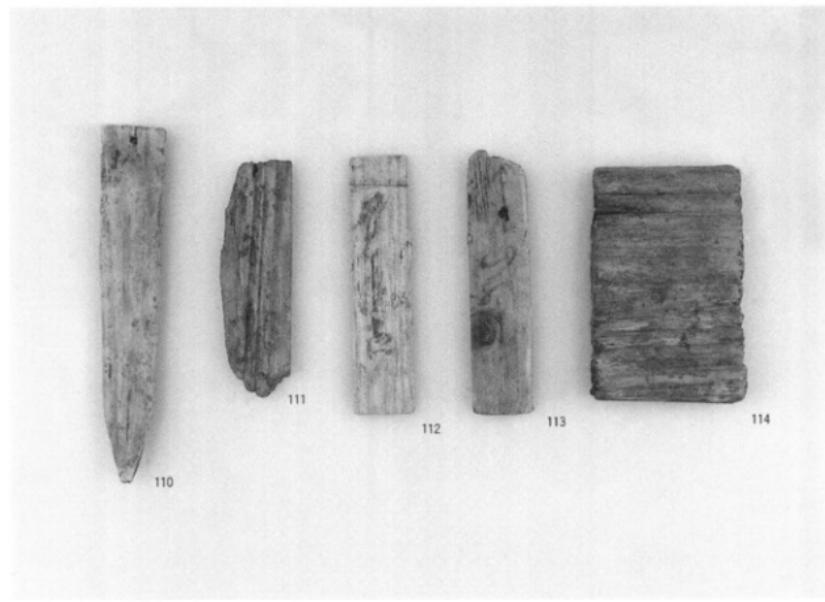
土壤 SK01 (59~63)、SK02 (64~74) 出土遺物



土壤 SK02出土遺物



土壤 SK02出土遗物



土壤 SK02出土遺物



115



118



119



116



117



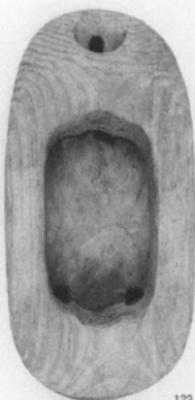
120



121

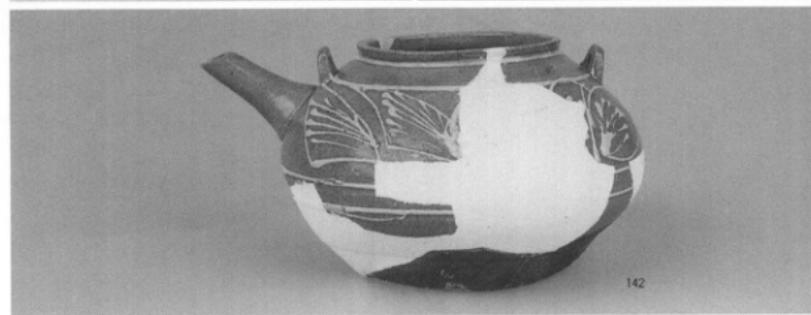
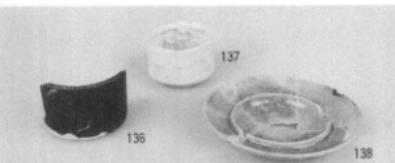


122

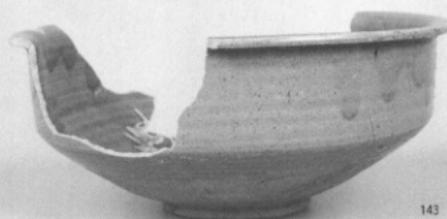


122

土壤 SK02出土遺物



土壤 SK03出土遺物



143



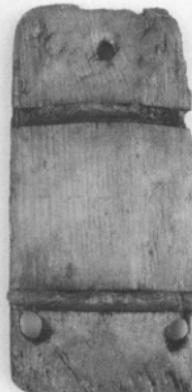
145



144

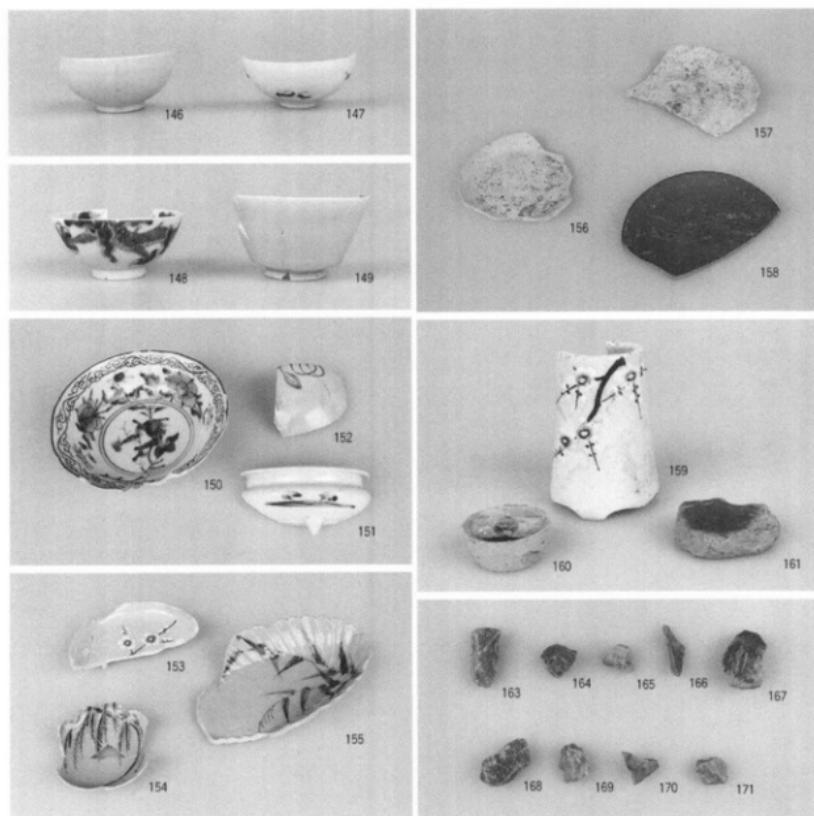


145

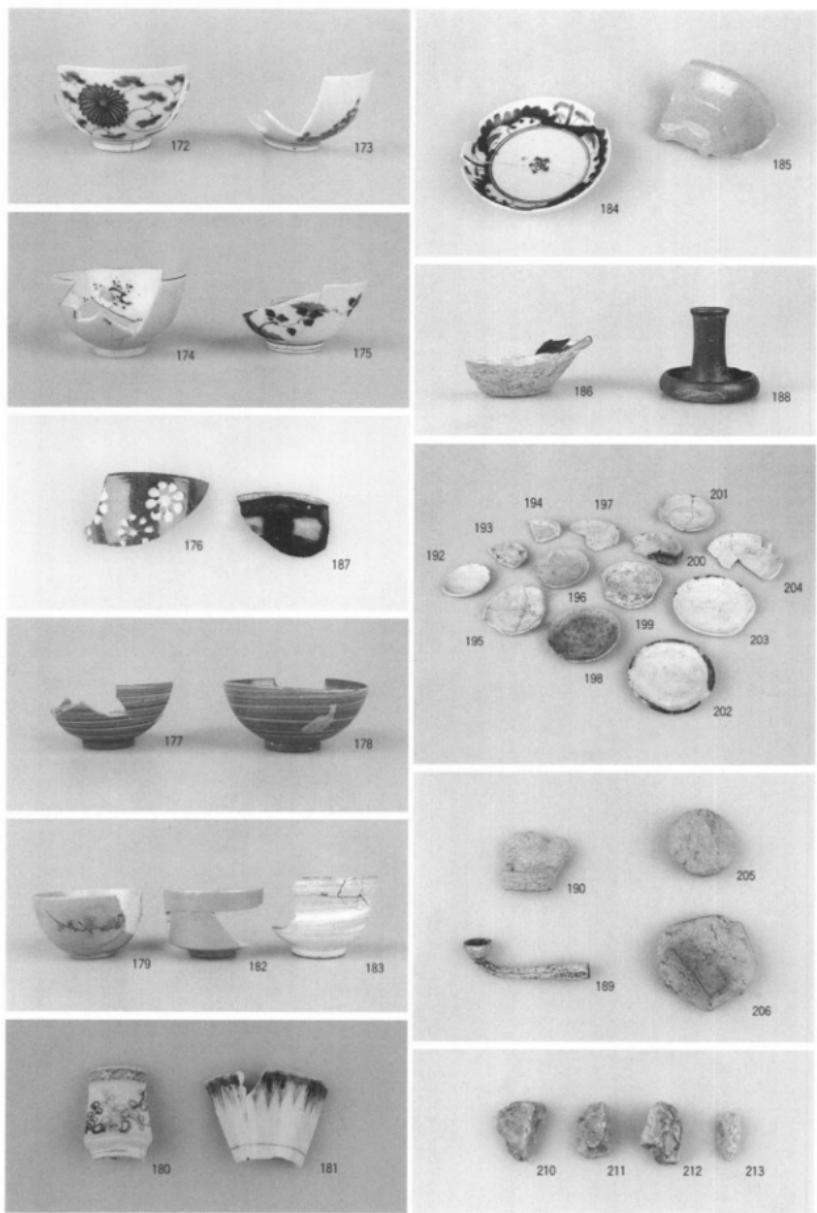


144

上端 SK03出土遺物



土壤 SK04出土遺物



土壤 SK05出土遺物